

---

# 十二のBSIS

@mia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十一のBESIS

### 【Zコード】

Z3537Y

### 【作者名】

@mia

### 【あらすじ】

日本とロシアのハーフである主人公が特別なISを乗り回し色々とする話。

姉との因縁、女ばかりの学園、迫り来る様々な敵……。  
主人公はこの学園でどういった青春を送るのか！！

## 設定集（前書き）

BUISを読むにあたって、分からぬことなどが色々あると想つんで  
オリジナル設定のところだけでも記載することに。

ちなみに、後に出てくるHSのスペックDATAはあくまで私の想  
像でしかないのであしからず。

（H23・11・23 DATA更新）

日崎ヴァーディム

国籍	ロシア
性別	男
身長	176cm
誕生日	五月一日
髪型	セミショート（色はアッシュグレイ）
瞳色	碧色。

日本（父親）とロシア（母親）のハーフ

母親は元代表候補生。

父親はIS専用プログラマー。

世界でISを扱える一人目の男子。

性格は明るめ、女子にも男子にもこのまれそつなタイプ。

一夏の同居人である。

一夏同様に専用機持ちだが候補生でない。

【イズムルート・フスピィシカ】（翠玉の閃光）

ヴァーディムの専用機。

機動力は世界トップ5の中に入り、特に加速度においては世界一。速さに重点を置いてるので、近接武器の扱いに長ける。

さらに誕生石のコアによる補正で一瞬ながら音速を超える速さで動くことも可能。

誕生石【エメラルド】を持つB S I S。

スペックDATA

攻撃力 B (近接S 射撃C)  
防御力 B (機体B 回避A)

燃費 B  
機動力 S (最高速度A 加速度S)

熟練度 C

特殊性能 C (一覧  
・連続瞬時加速  
・絶対回避)

総合戦力 B

搭載武器一覧

・ヴェーチェル、リヨートウ

部類 ツインダガー

非実体武器

ヴェーチェルは【風】、リヨートウは【氷】を指す。

刃渡りは約50センチにも満たないが、二つを合わせて長くすることができる。

さらにエネルギーを増幅することでも刃の調節が可能

・翡翠

部類 日本刀

実体武器

刃渡りは約1M、HSが用いる日本刀の中では短い方。居合をするために鞘も展開することが可能。

・スイエールイ・ブーリヤ  
・灰色の嵐

部類 二丁拳銃  
実体武器

何の変哲もない自動式拳銃（イメージとしてはマカロフPMをIFS用にしたもの）をさらにイズムルート用に改良したもの）、生身の人間でも携帯できる。普通の拳銃より威力が爆発的に高い。

一マガジンに八発

### 特殊性能一覧

・連続瞬時加速  
マルチイグニッショングースト

瞬時加速を連続して行い、不可能かと思われた曲線行動が可能となつていてる。

しかし、曲線行動はエネルギーを大幅に消費するため、ヴァーディムはあまり好んでない。

直線行動と完全停止の繰り返しを行つことで、相手のセンサーの錯乱をすることも可能。

・絶対回避

シールドエネルギーを消費することで、実体非実体に関わらずほぼ全ての攻撃を避けることが可能。  
が、普通に受けた方がエネルギーの消費が少なくて済むという機会がすくなくないので、使い所は考え方。

### 誕生石のコア

世界に十一しかないBSHSのコアで、その名の通り十一の誕生石がモチーフ。

それで作られたISはBSISと呼ばれ、それらはどの国ににも属さないが、原則その所有者の国籍のISとして扱われる。

が、国家が実験などに使うことは束博士が全禁止している。

コア自身に自我があり（いまだ会話が試みられたことはない）、操縦者を選ぶ。

機体は既に製作が終了しているがいまだに操縦者が現れないコアも何個がある。

普通のISの用に成長していくので、完成はないとされている。

誕生石のコア一覧《》内は所有者の国籍

一月 二月 三月 四月 五月 エメラルド《露》  
六月 七月 八月 九月 十月 十一月 トパーズ《無》  
十二月

## プロローグ

「母さん。俺、ようやくスタートラインに立ったよ」

母さんがいなくなつて、もう七年が経つ。同時に、姉さんを恨み続けて七年が経つ。

あの夜、姉さんは俺を殺さなかつた。あえてそうしたのは明確だつた、姉さんは誰よりも“喜劇”を楽しむ人だつた。

母さんを殺して、尚且つそれを“喜劇”の始まりと叫んだ姉の顔は今でも忘れられない。

IS……。母さんが大好きだつた物、姉さんが殺しの道具として使つた物、そして何よりそのISで、俺は姉さんに打ち勝つ。

まさか、俺までISに乗れる口がくるなんて思いもしなかつた。しかも専用機まで用意されているとは、父さんに感謝しないといけない。

日本人でありながら、ロシア軍のISプログラマーをしている父さん。七年前に作った父さんの一つ最高傑作の内、一つは姉さんが、もう一つは俺が受け持つた。

当初から、俺が受け持つ予定だつたらしいがいかんせん動いてくれなかつた。

母さんの「アを使つまでは。

死ぬ前までロシア代表生だった母さん、その母さんのISの主力武器であったツインダガー、『風の刃』と『氷の刃』を待機状態のISに添付する。

ロシアの『凍える風』、それが母さんの一つ名だった。

“イズムルート・フスピイシカ”

ロシア語で“翠玉の閃光”と呼ばれ、機動力に長けた近接戦闘万歳な俺の相棒だ。

待機状態のイズムルートは、ペンダントとして俺は身につけている。自分の誕生石でもあるので、何故だかはわからないけど安心感がある。

「母さん……。俺、そろそろ行くよ」

最後に母さんとの想い出を少しだけ想い出してから、俺はこの家をでた。

プロローグ

～オワリノハジマリ～

INS、それは世界のどの兵器よりも総合戦力で勝る兵器であることは、既に証明されている。

インフィニティ・ストライクス

何故か女性だけが扱え、男性にはピクリとも反応しないらしい。にも関わらず、世界で“唯一ISが使える男子”それが、織斑一夏だった。

今回はラッキーとしか言いようがない。秘密裏で行うには限界があるし、ISが使える男子が一人でたらもう数人いてもおかしくはないはず。

怪しまれるのを防ぐために、少し転校を遅らせる必要があつたが、まあいいだろ？

「じゃあ、行つてくるよ」

誰もいない家にしばしの別れを告げて、俺は家を飛び出した。

IJからIS学園までは電車で一時間程かかる、徒歩の時間を含めると一時間半になる。

今回はIS学園から迎えがくる手筈がついていたので、気が楽なはずだったんだが……。

何故か家の前には黒塗りの外車が止まつていて、それはこの空間には異質なものだった。

俺が唖然としている内に、後部座席から一人の女性が降り立つた。一目みてただ者ではないという気配を感じとつた俺は、思わず警戒体制をとつてしまつた。

「やあやあ、気が日崎ヴァーディム君だね。その体制は正解だけど、今は下ろして……ね」

顔と声は笑っていたが、眼は笑っていなかった。

「あ、はい。すみません」

「意外と日本語流暢なのね」

俺が警戒体制をとつた途端に、ようやく自然体を見せたこの女性は専用機保持者みたいだった。

「えっと、どちら様ですか」

「私は更織楯無、EIS学園の生徒会長であり学園の長」

凜、とした立ち振る舞いで会長は続けた。

「つまり、学園では最強ってこと」

更織先輩、と言おうとするが楯無でいいことだった。

「楯無先輩はどうしてここにいるんですか」

「ん、私はとある任務の帰り。折角だから転入生でしかも男子な君を一目見たくてね」

それから視線を上から下に移動させて、また上に戻す。

「ふうん、面白いね」

「一体これで何かわかるんですか」

答える代わりに先輩は微笑みを返し、それにつれては何も言わなかつた。

「わや、早く乗つた乗つた」

樋無先輩に背中を押されて、黒塗りの車に乗る。中は見たことないぐらい広いし、座席もかなり高級そうだった。

「す」こですね、この車」

「まあ、君はお嬢さんみたいなもんだからね」

それからも色々と会話しながら、しみじみと高級車の感覚を味わつていた。

これから、新しい日常が始まる。そう思えるだけ、今は楽しめそうだったことだな。

## プロローグ（後書き）

えっと、@m\_i\_aです。

以後よろしくお願ひします。

……アニメもだいぶ前に終わったし、原作はもう半年も出でないし、  
需要つてあるのか？？

いや、私の需要がある（笑）

次回からさっそく戦闘に入つていきますよ。

## 第一話 翠玉の閃光

「皆さん、今日は転入生を紹介します」

「また」のクラス?」

「今度はどんな可愛い子かな」

「きっと候補生なんだろ?」

「静かに、それでは紹介しますね」

教室のドアを開けて中に入る。すると、教室内が一瞬静かになる  
……が。

「「「あやあああ」」

と思うと大多数の女子が騒ぎ始めた。

「えつ、何。男じやん」

「織斑君だけじゃないの?」

「しかもまた美少年」

「」の教室の騒ぎに一切動じないのが一人だけいた。

「お前ら、静かにしろ」

織斑千冬、織斑一夏の姉であり、元チャンピオン。

「織斑……千冬、さん」

「ん、流石に私は知つてゐるか」

話を聞くとこりによるところによると今はここで先生となつてゐるらしい、とか、先生だ。まあ、妥当なところだらう。

優秀な選手ほど優秀なコーチはいない、と俺は思つてゐる。

「さて、自己紹介をしてもらおつか」

軽く返事をしてから、教卓に向かつ。そして黒板に自分の簡易プロフィールを表示させてから、自己紹介をする。

「えつと、名前は日崎ヴァーティム、歳は十六。母さんはロシア人で、父さんは日本人。一応世界でEVAが使える男子つてことになつてします」

最後によろしく、とだけ付け加えると教室がまた沸く。

第一話

（翠玉の閃光）

「えつと、日崎君だけ」

「織斑一夏か、俺のことは一夏って呼んでくれ。いやあ、これで男子三人

「おう、俺のことは一夏って呼んでくれ。いやあ、これで男子三人  
目が来てくれて助かつたよ」

「三人……？」

データにはそんなことは記載されていない、ISの部分展開して  
からデータベース検索を行つたが、結果は同じだった。

「やあ、僕はシャルル・デュノア」

「……田崎ヴァディムだ。あと、少しいいか？」

上を指しながら、一人に言つ。

「屋上……ね」

「じゃあ、案内するよ」

シャルルは勘がいいのか、少し警戒体制になつたようだが一夏は  
今だに普通のままだつた。

「で、何を話そつとしたんだ？」

「僕も気になるよ」

「单刀直入に言おう。……シャルル、お前女だろ」

一瞬、二人の顔が引き攣る。

「どうやら、本当みたいだな」

「……それを知つて、どうするつもり」

場合によつては、口封じの為に君を殺すよ。とでも言つたげな目線で俺を睨んでいるが、まだ武器は出していなかつた。

「別に、ただ確かめたかっただけさ。男が簡単に乗つて良いようなもんじやない、このHISつてのはな」

「え、そつなのか」

「ああ、多分一夏は東博士に選ばれたんだろうよ」

「ヴァンもか?」

「いや、俺はHIS以外は全く動かせない。HIS適性も『測定不可能』だ」

ラファールも打鉄も試してみたが、結果は同じ。この“イズムルート”だけが、俺を受け入れてくれていた。

「ならどうして君は乗れるのさ、実は君も女の子じゃないのかな

「別に証明しても良いんだぜ、一夏を呼んだのもそのためだ」

「むうう……。分かつた、信じる

要らない想像までしたのか、シャルルの顔は少し朱かつた。

「さて、今日の一時限目は実習だつたよな

部分展開させたEISから情報を確認する、と共に時刻の確認。

「そろそろいかないとヤバいな

「俺まだ着替えてねえよ

普通は下に着ておくだろ。

「早く行くよ、一人とも

全力疾走で更衣室経由でアリーナに向かったが、少し遅れてしまつたので後に伝えられるであろう伝説の出席簿チヨップを、早くも受けるはめになつていた。

「今日の授業は……そうだな、ヴァーティム

「はい

「EISを展開してみる」

生徒から少し離れて、EISを展開する。

「あれ、ヴァンのEISってなんか小さくないか

「EISの設計なんだよ

それもそのはず、この《イズムルート・フスピイシカ》最大の特徴は、等身大のアーマーを全身装甲の様にしている所だ。

だから、各身体のパーツ毎にピッタリフィットするよう生計された俺の専用機は、小さくなるのが普通なのだ。

機動力を高めるための、このやり過ぎ感がまた堪らなくいい。

「よし、じゃあ誰かヴァディムと模擬戦してみる」

「私がやりましてよ」

セシリ亞・オルコット。

イギリストの代表候補生で、専用機は“ブルー・ティアーズ”だつたけか。

「相手にとつて、不足無し」

「なら、所定の位置につけ。生徒は観客席へ急いで移動しろ、5分後に開始する」

所定の位置までエリでゅうくりめに飛んでから、最終チェックを行つ。

大体各エネルギーはマックス近くまでチャージ済み、機体の反応も悪くない。

ちなみに、エネルギーは満タンにしない派だ。たくさんいれっぱ

なしつてのはなんだか好きじゃない。

そんなこんなで、5分後。

『では、始めるわ』

「こつでも

『同じく、ですね』

今回はカウントダウンは無しで、すぐに始めないと。

「覚悟はよろしくて?」

「……そんなことを言つてられるのも今の内だ」

「威勢だけは、褒めてさしあげましょ。」

「ムカつく奴だな、こいつ。

「時間も少ない、5分で決める」

「決められる、の間違いではなくて?」

ああやつて高みにいられるのも、今の内……。力は使つべき時に使つべき形で使つ、それが正しい使い方だ。

「一気にカタをつけますわ」

遠距離からの射撃攻撃、それが彼女の戦い方だった。あれだけの

装備を全発射しても“隙間”は必ず生まれる。

「……相手が悪かったよ、お嬢さん」

意識を一点に集中させる、そして瞬時に爆発させるイメージ。

全ては、一瞬だ。

「加速するぜ」

弾丸と弾丸の間をすり抜けて接近する、普通のIISの様に無駄に幅広くないので、スイスイと進む。

既に弾丸のスピード、軌道、そして威力は大体把握済みだ。途中でツインダガーを用いて落とせる弾は落していく。

「意外と、やりますわね」

射撃を取りやめ、ビット攻撃に移る。

「これなら……」

「だが無意味だ」

そのビット攻撃こそ、彼女最大の攻撃方にして最大の過ち。

普通ならその不規則な攻撃に悩まされるところだが、残念ながらビットでの攻撃中に棒立ちしている相手に俺が劣るのはありえない。

「マルチイグニッショングースト  
連続瞬時加速」

これを用いて、加速から攻撃を繰り返す。そうあることでゲットを全てたたき落としてから……。

「終わりだ」

後ろから喉元に“ヴェーチェル”、そして背中に“リヨートウ”を突き立ててそう囁く。

「降参するか?」

「……私の、負けですわ」

しつして、対候補生戦績は幸先がいいことに勝ち星となつた。

## 第一話 翠玉の閃光（後書き）

いつも、@miaoです。  
いかがだったでしょうか。

面白いと思った人も、面白くないと思った人も、ここまで読んでも  
らってありがとうございます。

タグに関しては、今だとネタバレになってしまいのでもまだ控えめ  
です。  
その内色々と開放されていくので、これからもよろしくお願いしま  
す。

## 第一話 銀髪の少女

模擬戦を終え、ピットへと降り立つヒドレイツ代表候補生のラウラ・ボーテヴィツヒがいた。

「貴様がヴァーディムか」

「ああ、そうだが」

冷淡な声や左眼にした眼帯が彼女がいかに強いかを語つてゐるようだ、そんな気がした。

「今の戦い方だが……中々に面白」

「そりゃどうも」

「だが、機動力に頼る戦い方では私のシユヴァルツニア・レーゲンは倒せないぞ」

確かに、あのA.I.C.はかなりの強さを誇る。だがしかし、それには弱点がないわけではない。

「ああ、そこが問題なんだよな……」

「J.I.C.はとりあえず、対策なしこう対応をしておいた方が後々で戦つた時に有利っぽいので、そりしておくかな。

「楽しみにしてるわ」

颯爽とばかりに立ち去つていく彼女の後ろ姿を見つめながら、俺はしばらくその場を動けずにいた。

「……って、今は授業中じやん」

胸によくわからない蟠りを残しながら、俺はアリーナへと向かった。

## 第一話

～銀髪の少女～

「ヴァン、お前こんなに早く動けるのか

「まだ速く動けるけどな」

ちなみに、今回の戦闘に関して彼女は不服なようだつた。まあ、それもそのはずだろう。イギリスの代表候補生たる者が僅か5分もかからない内に負けるなんて、誰が予想出来たか……まあ俺は勝つことしか頭に無かつたがな。

「ヴァーディムさん、今回は負けましたが次は負けませんわよ」

と言い残して、彼女は去つていつた。……いかにも負け犬っぽい台詞だと思ったが、彼女のプライドのためにも少しばかり黙つておこうじゃないか。

それから時間は流れ、昼休憩に。

「学年別トーナメントねえ……」

「ん、まだ考えてたんだ」

昼食であるカレーライスを食べながら、俺はシャルルの言つ通り思案中だった。

今日の実習が終わってからすぐに生徒に通達され、この昼休憩ではこの話題で持ち切りだった。というよりかは、持ち切らざるを得ないと言つた方が正しいのか。

「しかも、二人組ときた」

つまり、誰がとペアを組まなくてはならないそうなのだ。この学園で友人が極端に少ない（まだ転校初日だつてのに色々ありすぎだろおい）俺にとつてはかなり痛い話である。

「そりいえば、ヴァンは誰と組むんだろうか」

「さあ、僕は一夏と組むからなあ」

一夏はシャルルと組むらしいし、これは困ったな。今のところは、この二人しか友人がいないからな……。リア充爆発しろって、今使つて良いんだつけ？

そんなことを考えながら、食事をしていると。

「ねえねえ、田崎君はもつ決まつてるのかな」

「もしいなかつたら、私と組んでくれないかな？」

「あ、抜け駆けはするいよ」

「いや、ちょっと階落ち着いづせ」

食堂にいた数人の女子に押しかけられて困っていたところ、そこに颯爽とある少女が現れて。

「私に決まっているだろ！」

周囲のざわめきが一瞬にして止む、正にこれこそ嵐の前の静けさ。とでも言えは良いのか、それをいいことにラウラは俺の方に近寄ってきた。

「異論は？」

「ない、といふかこつちから願い出たいとこだな」

学年第一位の実力を誇るのはきっと彼女だろうし、その彼女から声がかかると言つことは俺の実力が少なからず認められているということに繋がる。

それに、俺自身が間近で彼女の戦い方を見てみたかったってのもある。

「それなら問題ないな」

その会話を聞いて、さつきまで群がっていた女子群は散らばってしまった。

少し待ってもラウラがもう何も言にならなかったので、再び昼食であるカレーライスに手を伸ばす。

「いやいやいや、ちよっと待ってよ一人とも

「そんなに簡単にタッグ組んでもいいのかよ

「簡単も何も……な

「せうだな、ヴァティムの言つ通りだ

「自分が一番強いと思つ奴と組む」

「お、見事にハモったな。てか、俺ってラウラからせう思われてたんだ。嬉しいじゃないか。

「…………」の一人ならなんだか良いような気がする

「一夏、同感だよ

そして二人も飯食を再開する。

「あ、そうだ。ラウラ、放課後特訓用にアリーナの申請を……」

「既に終わっている、一七三から第四アリーナだ

「了解

最初から俺を誘うつもりでここにきたようだったので、手間が省けたらしく。ちなみに、俺としても手間が省けたので良かつた。

「ではな

既に昼食は済ませていた様で、ラウラはよくつと踵を返して教室へと戻つていった。

その後ろ姿にまた見とれていたこととまた気がついて、あわせてカレーを食べに戻る。

「ヴァーディム君って……」

「ん、なんだ」

「もしかしなくとも、ラウラに惚れたでしょ」

「ん……、そうかもな

確かにラウラに好意を寄せていることは認める、でも単純にそれだけじゃない気がするんだがな……。

「あまり否定しないんだね」

「まあ、彼女に会うのもここにきた一つの理由としてある。……勘違いしないでほしいが、これは専用機持ちの面々を見たかったと言う意味に過ぎないからな」

言ひ訳ともとれる言葉を濁しておきながら、またカレーに手を伸ばす。

「なるほど、なら後で白式とも模擬戦するか

「僕のR・リヴァイヴ・カスタム?ともしてほしいな」

「なんなら、一人まとめてでもいいぜ。どうせ一人組のトーナメントなんだし」

「言つたね、後で後悔しても知らないよ」

「いいまで言われては引き下がれねえな」

「あ、やっぱ明日以降でもいいか?」

今日はラウラとの訓練に専念したい、といつもあるが単純に模擬戦を一日に何回もするもんじゃない。

といあえず、さうやって濁しておきながら今日の昼を終える。

その日の放課後、指定された時間の10分前にアリーナに着くともうラウラはそこにいた。

「早いな」

「……ふん、お前が遅いだけだ」

「まあ、今日からよろしくお願ひしますよ。教官」

「……私はそんなに大それた人間ではない」

瞬時に織斑先生を思い比べたのか、ラウラは少し肩を落とす。よつと霧岡気だった。……こりや口が滑ったというレベルで済みそうで

はないな。

「スマン、ちよつとした[冗談のつもりだつたんだが」

「気にするな。いづれ私もそつなる身だ」

ラウラが教官か……。

それをイメージして、すぐピコンと来ることから多分ラウラはまだアリバウラといふ氣質があるんだと思つし、そのための実力はまだまだ向上していくだろつ。

「んじゃ、改めてよろしくな。ラウラ」

「ああ、じつに頼む」

握手を交わして、俺達のペアはここからスタートした。

「それじゃあ、まずはどうじよつか」

「つむ、まずはお互いの機体のデータが必要だな」

「うう、まずはお互いの機体のデータが必要だな」  
やうにって、HISを部分展開させるラウラ。それに随つて俺も部分展開する。

本来なら、全展開の方がいいがそつすると俺の目線が合わないのでもうしてもううた。

「それこじても、このA-HISはひやつぱる威だな」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーのそれぞれの頭文字を取つたその能力は、感性停止能力でありロックした相手の動きを止めることが出来る。

ラウラ自身は、この能力のことを停止結界とかなんとか言つていたが、ズバリ的を得た表現である。

かなり高性能な感じだが、弱点がないわけではないと思いたい……。  
今はまだ見つけられないが。

「機動力ではお前の方が上だ。だが、これでは遠距離戦闘はほぼ苦しいな」

「基本的にはこの近接戦闘が、イズムルートの持ち味なんだな」

「あらゆる場面を想定して、戦い方を考慮しないとダメだぞ」

「なるほど、だからラウラのHSは万能型なんだな」

「当たり前だ」

「とりあえず、作戦と言つても一対一に持ち込む戦い方が一番手っ取り早いと思つ」

「それができれば問題はないが、敵も基本は連携をとつてくるだろ

う

「なら、いつも連携とつてみるか?」

「そうだな……お前のその機動力を私の攻撃力に転化、あるいは私

の停止境界をお前の攻撃力に転化する」

「具体的には？」

「前者はお前が私を武器」との適性位置まで高速で運び、そこからの攻撃を打ち込む訳だ。後者は私が停止結界を用いて敵を止めている間に、お前が攻撃を打ち込む」

どちらにしろ口にしてしまえば単純なんだが。

「前者の場合は、俺とラウラのタイムラグが発生する可能性。後者に至つては、俺がAICに巻き込まれないかが心配だ」

「前者は地点に達したら勝手に降りる。私がその程度のタイムラグを測定出来ないとでも？」

「後者の場合は？」

「お前が攻撃するときだけ、停止結界を一時的に解く。なるべく相手が動く暇なき連続攻撃を与えてほしい」

「了解、わかりやすい説明だつた」

こうして、俺とラウラは簡単な作戦会議を終えて特訓に入ることにした。

## 第一話 銀髪の少女（後書き）

予定より早めに第一話を投下してみましたがどうでしょうか？

今回はちょっと内容を濃くしてみたつもりでしたが、はたして伝わったでしょうか……。

さてさて、とりあえずは次の話の予告的な感じになると想ひついですが。

次回の前半部分は大体この特訓とかについてなんですが、後半からこの作品のタイトルでもあつた伏字の部分について書こうと思案中です。

このまま伏字のままにしておいても良かつたのですが、やっぱり隠したままと言うのは居心地が悪いので。

なぜ、【イズムルート】が彼を選んだのか。

気づいている人があまりいないことを祈りつつ。（面白みが半減してしまいそうでですので主に私の）

それでは、また週末（予定）にでも。

## 第三話 誕生石のマム

「どうあえず、軽く準備運動がてらに軽くやるか」

「ん、そうだな。ラウラのAICのタイミングとかも知りたいし」

模擬戦、というよりかは武術などに使われる約束組手に近い戦闘。俺のAICに合わせて、近接限定の組手は妙に楽しくもあつた。だが忘れてはいけない、これが人殺しの兵器になりうることを……。

「どうかしたか、ヴァディム」

「ん、少し考え方をな」

約束組手とはいえ、戦闘中に余計な考えを持つとは我ながら情けない。

今は集中して、ラウラに向き合わないと彼女に失礼だ。過去なんて振り返っている場合ではない、振り返る必要もない。

### 第三話

～誕生石のマム～

ラウラと特訓を始めて早三十分も経っている、大体俺の速度を攻撃転換するには把握出来たようだ（戦闘においてのラウラの適応能力は半端ではない）次はラウラが一度AICを用いて敵の動きを止めて、そこに攻撃を打ち込む方の練習なのだが。

「また失敗……か」

「済まない、ラウラ。タイミングがどうも掴めなくて」

特訓方法は至ってシンプル極まりないもので、ラウラが空中に放り投げた空のマガジンをA.I.Cで停止させ、それに向かって俺は加速。その後、タイミングを合わせてラウラがA.I.Cを切断することで、俺はA.I.Cの効果を受けないまま攻撃を加えることが出来る。

……と詫つわけなんだが、いかんせん上手くいかない。

まず、瞬時加速が使えないのは痛かった。自分の身を案じるためでもあるが、スピードがイマイチ乗らないのでタイミングがズレる。

「まさか、初速度の向上のために加速する時に一度瞬時加速しているとね」

「とにかく、三メートルあれば十分なんだが……」

今回はその課題もつこでに乗り越えよう、と二つ手のリトルの提案で瞬時加速は使わないことになつてこる。

そして、二つ手はなにより田標が小さいんだよこれが。

空のマガジンつつても、I.S用ではなく通常武器の方を用いている（理由は学園内にいらないのが多数あつたからだそうだ、いつ調達したかはあえて聞かないでおいたが）ので、当てづらい。

「いへ、居合とか使えないのか？」

「……それだ！」

「ん？」

全く懸念してなかつた。

そうだよ、居合を使えば良いんだ。基本的にツインダガーばつかり使つてるから、日本刀の装備のことを忘れていたよ。

てか、イズムルートの初期搭載武器だつた……。

「日本人である父さんに感謝しないとな」

ツインダガーを一度戻して、日本刀“翡翠”を展開させる。

「ふつむ、良く出来ているじゃないか」

日本にやらしてその輝きを見ていても、心が洗われるような感覚……。

「のままでは居合は不可能なので、鞘も展開しておく。というかまあ居合なんてやつたことがないからつまづくかどうかなんてわからないが、とりあえずやつてみよう。」

「いいぞ、ラウラ」

さつきまでの一連の流れで空のマガジンが放り投げられ、それが途中で止まる。その止まった瞬間を見計りつて、踏み込む。

一歩田は半歩程度に留めて、体制を整える。前傾姿勢にしつつ一歩田は大きく踏み出して、そこからスラスターを用いて加速する。

居合の極意はよく分からぬが、とりあえずイメージだけを浮かべる。田標を定め、刀に手をかけ、一気に引き抜く。

先ほどはなかつた手応え、確かにマガジンに攻撃を当てることが出来たのだが。

「まだまだこれでは使い物にならんな」

マガジンは不揃いな形で割れていた。中心（多少の誤差はあれども）を捕らえて斬らないと、ラウラ的合格ではないみたいだ。

「でも、これで感覚は掴めたはず。もう一度頼む」

今日の特訓時間、ギリギリまでこれを続けたが、成果は少なく合格を貰える所か今だに攻撃が当たる確率も三回に一回程度だった。

一日で身につく技術でないことは覚悟していたが、いつも上手くいかないのは少し気が滅入ってしまうが、新しいことに挑戦する時は大体こうだ。

と、自分自身に言い聞かせて今日のところは解散することになつた。んで着替えをちやちやと済ませ、寮に戻る途中……。

俺はとあることに気がついた。

「俺の部屋つてどーだよ」

大体放課後までに教えてほしいものだが、まあとりあえず夕食時なのでそれを食べてから山田先生でも織斑先生でも探すとしよう。

一夏とシャルルはもう夕食に向かつたらしく、どこにもいない。ラウラはラウラで何か用事があるって言つてたので、現在は一人淋しく夕食に向かわなければならない状況下に置かれている。

「おい、日崎」

後ろから声がしたので振り返つてみれば、織斑先生がそこにいた。

「何でしようか

「ちょっといい、大事な話だ」

「うーんとしても、部屋割のことについて色々と聞きたかったから丁度良かつた。

織斑先生に肯定の意思を伝えると、何も言わずに歩いていくので慌ててついていく。

歩いて5分くらいだろうか、俺は自分のクラスにいた。当然、そろそろ夕食の時間なので誰も教室にいるわけがなく俺は織斑先生と一対一で対話する形になつた。

「それで、用件はなんですか」

「なに、簡単なことだ……」

「ン」何秒かの間に、俺は織斑先生に後ろ手を取られていた。

「そのHIS……BHSIか、それをどいで手に入れた」

「ちよつ、先生。離して下せよ」

「それは無理だ。そんなことよつ、私の質問に答えろ」

「答えるも何も、貴女は知つてゐははずですよ」

BHSI、その単語の意味を先生が知つていてのなればこの質問は無意味だ。

「束博士にしかHISのニアは作れない……これが答えです」

「何を言つかと思えば、そんな洞を吹くか

「賢しい貴女なら分かるはずですよ、博士の性格上……ね

「生憎、私は分からぬな」

「妹思ひな博士なら、と言つた方がいいでしょつか」

「……」

「貴女が気づいていないはずがない、俺がBHSIに乗つてこる」とが意味することを、もつ針は動き出していくことを……」

「黙れ……」

その声はとても低く、女性だとは思えない程の威圧感。それを放つだけの理由が、この件にはあった。

BSIIS……、正式名称は【バース・ストーン・インフィーツ・ストラトス】といい、誕生石のコアを用いて作られた十一機のISのことを目指す。

束博士が一番最後に作ったコアで、ISのスペックを最大限に引き出すことができるコア。それが誕生石のコア。

だがしかし、そのコアで作られたISには自己意識が生まれるらしく、操縦者を“ISが選ぶ”形になる。

つまりに、ISは束博士による支配下から逃れるのでそれに乗つて好き勝手に行動することが可能になる。

今は力をヤーブしている（というより今はまだ試作段階で全力を

出せないだけだが）イズムルートも、膨大な能力を秘めている。

「分かつてます、これを扱うことが何を意味するかなんて」

いすれ戦争に巻き込まれる可能性だつて少なくはない。今は条約が結ばれているから良いものの、この条約が意味を成さなくなつた時点では俺はロシア軍に所属されるだろう。

いくつも学園が無国籍学園だからといって、条約が破棄され

た時点できつとこの学園も壊滅される。多分、ではなくて絶対に。

「……分かつてなんかいない、ISを用いた戦争なんてものがどれ程までに残酷かが」

「確かにBSISは戦争の起爆機になります。しかし、抑止力にもなりますよ」

かつて各国が「ひそつて核兵器を保持していたのと同じ様に、人は起爆材になりうる抑止力を求めてくる。

「それに、イズムルートが俺を選んだ」

別に乗ることを義務づけられてる訳じゃないけれども、俺にはやらなきゃいけないことがある。

「俺はイズムルートと共に歩むことを決めた、そして姉さんを倒さなければならぬ。……貴女がISを用いた戦争に関して否定的なのは知っている、博士がよく言つていたから」

「……」

「博士だつて、今自分が作った機体の制御が出来ないことが辛いはずだ。だけれども、そこで手を休める訳にはいかない」

博士がしてくれたことに対する感謝の念も込めて、俺はこのイズムルートと共にISで変わった自分の運命を受け入れ、そしてISで終止符を打つためにも、イズムルートは必要だから。

「そして、一夏が使つているIS、"白式"……これはBSISとは

また別だけれども、起爆材でもある抑止力の一「つ」

簡単に言えば、対BSIIS用ISとでも言えるだろ。対BSIISどころか、全ISに対しての抑止力にもなりうる程にあのISの力は大きい。

「貴女が知らないはずがない」

と、もう一度だけ言つてから後ろ手に捕まれていた体制を一瞬で解く。

「つ……」

「今の貴女なら、あの一夏でも勝てますよ」

それ程に彼女はISを、そしてたった一人弟を大切に想つていて。束博士のことだつて多少は心配しているはずだ。

それに、彼女はもうISからは離れられない。

「もう一つ、多分知らないでしようから言つておきますけど。束博士の妹さんが七月のコアから選ばれました」

それを聞いて、さらに瞳孔を開いてこつちを見てくるが、彼女に選択の余地はないし、尚且つ立ち止まることすらも「許されない。

過去の栄光だけでは、この先は意味がない。

## 第三話 誕生日のPART (後書き)

いかがだったでしょうか。

自分としては説明口調で今回は進めていたんですが、少々重苦しかったかもせんね。まあ、意図的にそうしたわけですが。

そして千冬姉ファンの方々には謝っておきます。  
なんか全然らしくないかんじにしてしまいました。

まあ、色々と原作ブレイクしていくと思こますがなるべく温かい目で見てもうるると嬉しいです。

## 第四話 ～ISという力～

イズムルート・フスピイシカ……。

表面上では500もないISの一つ、そしてそれらのISより高いスペックを持ちながらもまだまだ成長の幅が半端じゃないくらいあるという。

イズムルートは速さを欲している、それがなぜなのかは分からない。でもイズムルートは他のタイプは受け入れなかつたらしい、そして俺以外を選ばない。

なあ、イズムルート。

お前は何故俺を選んだ……いや、多分選ばれる運命だつたとしか言じようがないのかもしれない。

### 第四話

～ISという力～

そろそろ夕食時といつゝ、俺はさつきの畳ひた気持ちを晴らさうと、俺は食堂に向かった。

「あ、田崎君。丁度いいとこだ

「山田先生」

「「こちらに部屋割の紙があります、それに従つて自分の部屋に行つてください」

渡された紙を見ると、どうやら一人部屋を一人で使ってオッケーらしい。事前に荷物は送つていたので、整理は結構楽だと思つ。

「荷物運ぶの大変だつたそうですよ」

「うう……すみません」

「まあ、IS使いましたけどね」

いや、そんなに重くないはずだし……。てかそんなことでISを使うなよ、おい。

「とつあえず、夕食食べてから荷物の整理します」

「よろしくお願ひしますよ」

山田先生と別れて、食堂に向かう。今日の夕食は何カレーにしようか迷つていると、後ろから声をかけられた。

「よお、ヴァン。今から夕飯か?」

シャルルと訓練を終えた後そのまま来たんだが、一人で来ていた。

「そうだ、今晚は何カレーを食べようかなつて思つてな

「毎もカレーじゃなかつたつけてな」

「そりだが、何か問題でも？」

昼と夜じゃ食べる種類が違うから、俺的にはノーカンだ。朝は毎朝日本人的朝食を食べてるし……。別に問題ないだろ？

「いや、問題とこりつか……な」

「うん……ね」

「一人して何をアイコンタクトとつくるんだよ。まあ、一人も一緒に食べよひぜ」

食券を買って（ちなみにグリーンカレー）した）おばちゃんから商品を受け取り、空いている席を探す。

「うーん、中々見つからないな」

「ちょっと待つて……よし」

シャルルが何かを決意したように、とある席に向かっていきそこで数回の対話を交わした後でこっちにこい、的なアピールをしてきたので一夏と共にそつちに向かうと数人の女子と相席することになった。

「うわあ、織斑君とデュノア君と夕食なんて夢みたい

「うめんね、急に頼み込んで」

「いやいやいや。こんな幸福なんてないですよ」

「ありがとな」

なんか、俺疎外感？

「えつと……もしかして俺つて邪魔？」

「ううん、別に」

「うあえずは良かつ……。

「あまり気にかけてないから」

前言撤回。

やっぱ俺つて邪魔じやん、この転校初日疎外感がいつまで続くかな……。うん、頑張ろう俺。

その後も、色々と疎外感を感じながら夕食を黙々と食べべ、とうとおることにした。

一夏やシャルルが制止するが、部屋の片付けも残つてるのでとう理由で先に帰つた。

早足で自分の部屋に向かつたので思ったよりかは着くのが早かつた。とりあえず部屋割の紙と同時にもらつた鍵を用いて、部屋のドアを開ける。

部屋の中に入つて、電灯を点けてから辺りを見渡す。

「Sを使って程に大きな荷物は持つてきたりは無かつたので、少し違和感があつた。

部屋のど真ん中に鎮座されている、馬鹿<sup>デカイ</sup>段ボール箱<sup>ボックス</sup>……。隣に置いてある自分が持つてきた段ボール（引っ越しの時に用いるくらいの大きさ一（いつ）の数倍はある。てか、絶対人一人入るよこれ……）。

「もしかして、束博士ですか？」

「んや、当たられちゃつたねえ。じゃあ用件を……」

「イズムルートは渡さない」

「ありや、わかつた？」

「当たり前でしょ、貴女のポリシーは俺だって知ってる」

彼女は完璧にして十全な篠ノ之束である、すなわち作るものも完璧において十全でなければ意味がない……。

彼女にとつてこのBS-HSは欠陥品である、だが俺にとつちや唯一なもんでね。

「貴女が完全なる完璧<sup>コンプルート・オブ・パー・フェクト</sup>を心情にしてるのは知っています、しかし……」

「ちよつちタイム、君は何か勘違いしてると」

「え？」

「これこれ、じゃーん」

彼女は段ボールの中から飛びでて、さっさとまで自分が踏み台にしていた箱を取り出そうとする……が。

「ふにゃ……、お、重い」

「いや、手伝いますよ」

イズムルートを部分展開させて、段ボール内から器用にブツを取り出す。

「これ、なんか異様に重いんですけど……」

「まあ、全部マトヨーシカ的な感じの多重ロックなんだだけね」

彼女がそこまでしなければならない理由があるものが、この中にはある。と、少し考えている間にも既に解除が終わっていた。

「ああああ、中身をじ覽下れーー」

中には二つの拳銃、そしてチップが一枚入っていた。

「これは……？」

「見ての通り二丁拳銃、その名は“灰色の嵐”  
〔ツインバレット〕  
〔スイートルイ・ブーリヤ〕」

名は体を表す、とはよく言われるがこの二丁拳銃は正に灰色だつ

た。IS用、とかくイズムルート用で少しサイズが大きいし重い。

「君のには遠距離系武器が無かつたから、特別サービス……と言いたいところだけど」

「今回の目的は別、ですか」

「そうだねえ、本来の目的はこっち」

そういうて、チップを取り出して微笑む彼女。

多分、イズムルートに関わる何か。……まあ、どんなときでも俺には選択肢がないわけだが。

「……仕方ないですね、はい」

右腕を展開して、彼女に差し出す。待つてましたとばかりに何本かの線が繋がって、操作が始まるが……すぐに終わる。

「終わったよん」

「一体何をしたんです?」

「バスロット拡張領域の拡大とそしてこの子がイズムルート形態移行するためには必要な素材を、ね」

詳しい説明によると、拡大した拡張領域に灰色の嵐を追加してその残りの領域に形態移行した時に武器が生成できるようにデータを改ざんしたらしい。

データ上では、灰色の嵐が領域のほとんどを占めてこることになるが実際はイズムルートが更に強化されていくため……。いや、もつと完全にして完璧なE/Sを完成させるために。

それが彼女の欲望であつて、俺が姉さんを倒すためには必要な力。

「イズムルート、調子はどうだ？」

もちろん答えてくれるわけがないし、俺だって答えを期待したわけじゃない。何というか、もう癖になつた感じである。

「ちなみに、灰色の嵐はわざわざ部分展開せずとも携帯できるよ。重さ《ウエイト》の調整は自分でしてくれなきや」

「いや、別に俺はこんな物騒な物を携帯する気はないで……」

「これから時代がどうこうものかわかつてゐかな？」

……。

言葉も出なかつた。

その言葉には、別の意味がこめられてこるような気がしてならない。

俺は、ずしりとくるとも重い拳銃を手に取る。

「の重さと天秤にかける人の重さは、計り知れないものと知りながら。

## 第四話 ～HITという力～（後書き）

いえ～い、第四話目だ～。

前回よりまた重い話になってしましました。

えっと、まあでもこれが@mica仕様ってことで勘弁してください。

こんな感じでどんどん突き進んでいきますが、どうぞよろしくお願いします。

## 第五話 忘却の彼方

IS学園の地下にある射撃訓練所に俺はいた。勿論、セイキ受けとつた拳銃の試し撃ちをしにきた。

博士は用件が済んだ瞬間にどこかへ脱兎のごとく逃走していったので、詳しいことはあまり聞けなかつた。尤も、まだ博士にも策略を気づかれてはいないだろ?……。

いや、あの人のことだ。気がつかないふりをしているといつ可能性もないわけではないだろ? 俺にこれを渡したところはもう遠くない未来で……。

「今はやめとこつか

あんまりふさぎ込んだ考えばかりでは、気分も悪くなる。常に最悪の事態を頭にいれておくことは重要だが、それでネガティブになるのは本末転倒だ。

とりあえずは、拳銃の使い方だが……。

「拳銃なんて、久しぶりにもつな

あの時は、自分がまさかISを扱えるなんて思つてもいなかつたし、護身用くらいのレベルでしか拳銃は使えないはずなんだが。

まずは一つ手にとり、十数メートル先の的に標準を定めて何発か撃つてみる。

確かに、反動は凄いが無視できるレベル。知らぬ間に筋力でもつけたのかもしないが、今はとりあえず無心で撃ちたかった。

両手で支えて一マガジン（八発）を撃ちきったところでリロード、そして今度は右手で片手撃ち。つつきより狙いは少しづれるが、それでもなんとか撃てる。

また一マガジン撃ちきってからリロードして、今度は左に。それが終わったら一丁の拳銃を左右に持ち、交互に撃つ。

相変わらず反動は来るが、それよりも一心不乱に撃ちまくる。

途中で、重さの調節に使われていた鉛を調節しながら自分にあつた武器にしていく。

用意したマガジンを全て使い切つたことは、もう既に感覚を取り戻したどころか、以前より俄然撃ち易くなっている自分がいた。

「」の感覚、か……

忘れていた感覚、というよりかは抜けていた感覚と言つた方が正しいだろうか。それほどの違和感を胸に、俺は自室へと戻った。

あくる日、俺が朝食（朝定食セット+ミニカレー）を食べていると、ラウラが近寄ってきて。

第五話  
～忘却の彼方～

「今日も昨日と同刻同場所にこい」

「了解。ラウラはもう朝食べたのか？」

「今からだ」

「じゃあ、待ってるからこいつち来いよ」

「分かった」

ラウラが朝食（パンとローンスープにチキンサラダ）を持ってきたのを確認して、食べるのを再開する。

「そういえば……お前、私と以前にあったことはなかつたか？」

「は？」

俺の記憶上ではラウラとあつたことなんかないし、勿論ドイツにもいつたことがない。

「いや、多分人違いだろ？」「

「自己完結できたなら何よりさ」

「ほそつと、ラウラはこいつ言つた。

「……あいつの瞳は紅かつたからな」

「何か言つたか？」

あえて聞こえてないふりをしたが、聞こえないはずがなかつた。  
だが、紅色か……。

「ラウラは色々と勘が鋭い」とある、多分昔の俺も少しがら覚えているはずだ。だが、まだ今思い出してもらうわけにはいかない。

「そういえば、朝からしつかりと食べるんだな」

どうやって話をすり替えようか迷つてると、ラウラから話を変えてきた。

「ん？ まあ今日はちよつと腹が減つてたからな」

昨日の晩の射撃練習が結構きてるみたいで、いつもより少し多めの朝食だった。

「朝にエネルギーを十分補給しておくれのはいいことだ」

逆に夜沢山食べるのはあまりよくないらしい、といつのもちやんと理由があつて。なんでも、あまり身体の活動がない夜に沢山食べてもそれは全部脂肪分に回ってしまうかららしい、脂肪がつくと身体のキレに問題が発生して自分の力を十分に發揮できないそうだ。

脂肪分つてのは、いわば身体の中にある重りみたいなものであるからその理論は正しいと言える。

「常識だ」

と、少し誇らしげにパンをかじるラウラ。

「そりゃい」

「ふん……」

それからは俺もラウラも朝食を黙々ととった。

時は流れ授業に。

「今日の実習は武器の特性についてだ。デュノア」

「はい」

「今からターゲットを出す、それをアサルトライフルを用いて撃ち抜け」

ルールは至極単純で、呼び出されたターゲット（今回は500枚）を三分間でどれだけ破壊することができるか、というものでターゲット一枚一枚に得点が違うので高い得点のものを優先的に破壊することが優先される。

「分かりました」

話を聞いてすぐにISを展開し、すぐにアサルトライフルを構える。

シャルル・デュノア……。世界でISが使える男子、ではなく実は女子でその実態には別段興味ない。

使用ISはR・リヴァイヴ・カスタム？。以前から汎用性に優れ

ていたラフアールの拡張領域を増やして、様々な武器を色々と入れてるので様々な戦局に対応できるらしい。

実際問題、逆にやることが多くすぎて俺には向かない戦い方である。

「終わりました」

俺が色々と考えてこる間に、既にターゲットは全て撃ち抜かれていた。

スコアは10352点、量産機の平均が大体5000台、代表候補生の平均は大体8000台なのでかなり高いと言える。

「ふむ、まあいいじゃないか。セシリア、田崎お前達もだ

「了解ですわ」

「分かりました」

イズムルートを展開、そして一二丁拳銃を構える。

「全部含めて約一秒……もう少し早く展開しろ」

「これでも早い方だと思つんだがな、一二丁拳銃は昨日見たばかりなんだし。

「オル【シト、銃口をゼリに向けてこる」

「これはイメージしやすこよつこ……」

「言訳は無用だ、直せ」

さすがのセシリアもこの気迫には勝てないようで、しゃんとしながらも素直に従つようだった。

「お前達にも同様のことをしてもらひ、まずはオルコットからだ」  
皿巻もある射撃の腕の見せ所なので、セシリアは張り切つていた。

「フランスの第一世代には負けません」とよ

「昨日の試合をみたところ、射撃に関しては僕の方が上だと思つた  
俺としては後がつかれてるので早くしてほしい、それがお互  
いのためだ……。

「いつまで待たせる気だ」

織斑先生の制裁が下ったため、英仏の睨み合には終わつたがセシリ亞の方はまだ勝つ氣でいるみたいだ。

「では……こきます」

セシリ亞は六つのビットを操作して、ターゲットを破壊していく。

「てか、ビット操作なんてよく出来るよな

「一夏、あれ多分セミオートだ」

ビットの動きをよく見ると、停止と放射のタイミングが少し違う。移動はマニコアルだが、攻撃は秒単位のオートだろ。

まあ、さうだとしても六つのビットをしかも射撃間隔を考慮した上で動かすとは……。代表候補生の名は伊達じやなかつたと言つてころか。

「終わりましたわ」

スコアは9875点、平均は軽く越えたもののシャルルには程遠い。

「ほりね、やつぱり僕の勝ちだ

「だが、まだ俺が残つてゐるぜ」

そう言つて、拳銃とツインダガーを取り出す。

「俺は少し武術を嗜んでいてな、その延長線上として軍の訓練も受けたんだ」

「一体なにを言つてますの？」

「まあ、見てなつて

動かない無機質な的相手に、時間はとらない。

「全では、一瞬だ」

アジン　ドウヴァ  
一つ、二つ、三つ……。

心の中で呟いて、力を覚醒させる。力の流れが変わったことが分かる、自分の身体が自分のものじゃないみたいな、そんな感覚……。

「では……、始め！」

開始と同時に、ツインダガーの出力を最大にして自分は超速回転を行う。更にツインダガーを脇に挟んで一丁拳銃でこぼれたターゲットを狙い撃つ。

その間、僅か三秒……。

「終わりました」

力の流れをまた元に戻して、気分を整える。

「嘘……でしょ？」

「私達の一倍以上の得点を、あんな一瞬で……」

代表候補生どころか、この場に居合わせたほぼ全ての人間を震撼させてしまっていた。ちょっと本気を出しすぎてしまったようだつた。

カラーコンタクトがずれていなかを確認してから、イズムルートを収納する。

「すげえよ、ヴァン。こんなこともできるのかよ」

「まあな、母さんの形見で不甲斐ないといひは見せるわけにはいか

ないだろ」

……どうしても、反応が良すぎる。ハイパー・センサーも感度が抜群、回転に用いたエネルギーとシンダガーに用いたエネルギーの総和も以前より減っている。

昨日はそんなことなかったので、やはり束博士が拡張領域やその他うんぬんかんぬん言っていた時『ついで』に色々と弄ったんだろう。

多分、他の機能も以前より強化されているに違いないだろう。あの人気がしそうなことだし、俺としては願つたり叶つたりだ。

「いや、ヴァンとは戦わない方がよさそうだな」

「……戦場に行けば嫌でも戦わなきやいけない時がくる」

「え？」

「いや、なんでもない」

さつき一夏に言つたことを、自分に言い聞かせるべく復唱しながら、俺はいつかくるはずの戦争に嫌悪感を感じていた……。

## 第五話 忘却の彼方（後書き）

いかがだつたでしょうか。

今回は複線だらけの話とつてもひつてもいいくらい、色々と残しました。

こつからまた回収をどうやっていくのか、まだまだ考慮中なんですがね。

## 第六話 音速の先にあるもの

全では、一瞬だ。

なんてことはない、時間はいつだって細やかな点の連続……。ゲームとかであるセーブポイントとかの概念となら変わりはないと思うが、当然ながら実際に時間は遡れない。

だからこそ、一瞬なのだ。

俺が俺であるために一番必要な感覚とも言えるそれは、俺が抱えていた重みをさらに思い知りすこととなる。

おかげり。

忘れていた感覚……いや、一度完全に失った感覚。失うこと望んだ感覚。

ただいま。

忘れていた記憶、忘れようとしていた記憶、思い出したくない記憶……その全て。

今も昔も、あの日あの時あの場所で変わらざるをえなかつた俺の人生。いや、結局のところはそれがなかつたとしてもこの先にある運命は避けられるはずがない。ただ、俺が関わるかどうかがの相違点しかない……それだけだ。

～音速の先にあるもの～

少し集中出来てなかつた授業も、その後のHRも終わつて放課後。現在は「ウツラ」と訓練するべく、アリーナに向かつている。

「おひ、ヴァムーだ」

「えつと……あ、のほほんわ」と

一夏がやつぱり書いたのを思い出し、口に呟く。

「ん、おつむーと回じ呼び方なんだね。まあいいけれど」

「何か用件があるのか？」

「えつと、生徒会長さんから文を預かつてまじりました」

と、袖で隠れていた手から封筒を渡される。……どうやら出でるんだよ、おー。

色々とシッパリ所は満載だったが、このこののはあまり気にしないに限る。それに、封筒の中身も気にならぬ。

そして封筒を空けると、中には一通の手紙が。……ああ、文って手紙のことを指したのか。いついつ風に、たまにわからない日本語があるから困る。

とりあえずは、手紙を読んでみることにします。

『夕食前　に来て』

……どこに行けばいいんだよ、おー。

気がつけばのほほんさんはいなし、せりて俺は彼女の連絡先も知らない。

「……困った」

とりあえずヒントがないかどうか、封筒の中を調べてみるが何もない。手紙の裏にもないもないし、シャーペンなどで傷つけた様子もない……が、一つだけ分かった。

仄かな柑橘系の匂い、するとこりつまりあぶり出しだらう。戦場においてもたまに使われる文通手段としてあり、運のいいことにあぶり出しを上手にする口上も習つてたりする。

が、やつぱり一つ疑念が晴れない。

秘匿情報としてあぶり出しを選んだのは容易に想像ができるが、わざわざ秘匿情報にする必要がある?

「お、ヴァンじゃないか」

思案していく突然後ろから声をかけられたもんで、我ながらビックリしたが平然を裝つて一夏のほうに向く。勿論、封筒は既に征服の内ポケットの中に收めていて抜かりはない。

「今から特訓か」

「ああ、やっぱりパートナーであるシャルルに迷惑はかけられないしな

一日一日でどうにかなるほど、エリは甘くないがそれでも一緒にいる時間が長ければ長い程、エリは応えてくれる。

「精々俺達とあたるまで負けないよにな、とだけ言つておいつ

「なんでそんなに自信があるんだよ」

「そりゃ、パートナーがラウラだから……

つて、なんで俺はこんなにラウラを信頼しているんだ?

それに、久しづびりに開放したあの力……。もしかしたら俺は思い出しそうてるのかもしない、あの日のことを、あの戦争のことを

……。

「どうしたんだ?」

「いや、なんでもない

考えすぎだ。そう考ることにして、今は特訓に向けてしっかりしたくないところに申し訳ない。あらうとか信頼されてるんだ、俺は。その信頼を裏切るという行為自体最悪なことだし、それをしないように日々頑張ってきてるんじやないか。

「行ぐぞ、一夏」

「え、ね？」

一夏と一緒にアリーナに行くと、既にラウラとシャルルがそこにいた。

「……何故ソイツがこる

「いや、途中であつただけだ。それに今は戦場ではない、そつ氣を立てるな」

「そんなことを私がするわけがないだろうが、だが常に最悪の状況を予想しておくことは悪いことではない」

「今から氣にかけすぎだ」

「備えあれば憂いなし、とこつ諺がこの日本にはあるんだろ？？」

確かにそうだが。

「やつぱつ、田崎君とボーテヴィッシュさんはお似合いだね」

なんじひとを語ってくれる、シャルルよ。

「俺も思つよ、ヴァン」

一夏までつ？

「ふん、勝手に語つてこぬがいい

「どに行くんだよ、リウカ」

ふいつと外を向きながら、頬を少し赤らめてスタッタと歩き始めたので慌てて後ろを追いかける。一応一夏とシャルルに別れを告げてから、だが。

「おー、何でそんなにほぶてるんだよ」

「別に……ほぶててなどいない、ホラ、今から訓練するぞ」

先ほどまでの雰囲気とは打って変わって、凛とした表情でエウを展開するリウカ。この戦闘に向けたリウカの気合は凄まじいものだ、いやはや素晴らしい。

「じゃ、行くか」

イズムルートを展開して、レーベンの前に立つ。

「今日は軽い戦闘だ」

まわりの生徒たちをあえて残すことで、障害物と考えるみたいだ。軍の訓練でもちよいちょいやつてきたので問題はないし、それにこれからの一コーナメントでも活かせることがあるだろ。いつも基本的には一対一か一対多、しかも自分以外に味方が完全にいない状態を考慮してイズムルートに乗つてたからな。

この間の瞬間回転攻撃も、完全なる一対多を見越して組み立てたものなので今回他味方がいる状態では無理だ。

「じゃあ、始めよつか」

スイエールイ・ブーリヤ  
灰色の嵐を展開して、ラウラを迎撃しつつ距離をとる。ラウラの

AICに対抗するべく、俺は常に移動している。

AICの弱点として、完全なロックオンができていないと意味がない。つまり動きを読み取られないようランダムに動く必要性があり、それをラウラに対しても行うのは至難の業であるのは間違いないが、まだ距離がある分俺も何とかしている。

そしてそれをするために集中力も必要だし、AICは多数の攻撃には不向きだ。

「そろそろ加速する」

マルチ・イグニッシュ・ブースト  
連続瞬時加速を用いてランダムな直線運動で動きつつ、距離を詰めながらも射撃を続ける。リロードのタイミングを考えつつ威嚇射撃しているので、AICに阻まれることもない。

「よく考えたものだ、だが……」

動きを変えようとして、連続瞬時加速の切替を行おうとしている時にタイミングを合わされてワイヤーで左脚を絡みとられる。

「甘いゼラウ！」

俺は灰色の嵐を収納し、ツインダガーを展開する。その片方にエネルギーを集中させてその刃を伸ばしてラウラに向か、もう一つのほうはワイヤーを切るのに使う。

「甘いのは貴様だ」

伸ばしたエネルギー刃はAICによって阻まれ、さらにワイヤーを器用に動かしてツインダガーを落としつつ、イズムルートの全身を絡めとる。

ワイヤーに絡まれ、さらにAICにも動きを封じられる。だが、これも予想通り。

「残念だが終わりだ」

「試合はまだ終わってないぜ」

落とされたツインダガーの出力を、最大限まで引き伸ばす。

「なんだつ」

ラウラのAICが解けた一瞬を狙つて、俺はスラスター全てを用いた本気の瞬時加速を行う。それによりイズムルートは一気に最高速度まで加速、さらにその際に自らに回転を加えることでワイヤーを引き千切る。

その加速をさらに強める、それによりイズムルートは限界を感じてか警告音<sup>アラーム</sup>を鳴らすが、これ以降の戦いでも音速<sup>マッハ</sup>を超えられないようじやまだまだ。だからまだ頑張ってくれ、イズムルート。お前は伊達に閃光<sup>フスピイシカ</sup>の名を名乗ってるわけじゃないだろ、音速くらい超えられないでどうする。

その思いに応えたのか、警告音が聞こえなくなる。音速を超えた先にあるもの、無音の空間。何もかもが止まつて見えその中を自分が飛んでいる感覚。

そうだよ、これだ。

俺が求める景色、俺が求める感覚。

何もかもが彼らにとつては一瞬の出来事、俺にとつてもこの景色は一瞬のものでしかない、だがこの一瞬をえつかめれば……。俺は負けない。

この景色が終わる前に、全てを終わらせる。そう感じて瞬時に翡翠を開き、攻撃態勢に入る。

そつ、全ては、一瞬だ。

「リジューム・ラズ  
音速居合」

今まで加速してきた力学的エネルギーを全て一撃に繋げた攻撃、速度を増すことに威力を増す。音速を超えた攻撃は言うまでもなくシールドエネルギーをごつそりと持っていく。

スラスターを逆方向に噴射することで停止し、ラウラの方を向く。

「完全に捕らえたと思ったんだが……甘いのは私だったようだ」

「いや、俺もあれは博打だったから」

それにしても、今のはなんだつたんだらうか。

博士がイズムルートを弄つたと分かつてから、スペックの確認はした。だが最高速度は音速を超えてはいなかつた、精々以前の一割

増し位。やはり形態移行への前兆なのか？

フォームチェンジ

今は考えても分からないので後で博士に聞くとして、とりあえずは今の感覚だけは忘れない。音速の先にある世界、その景色、その感覚……。

## 第六話 音速の先にあるもの（後書き）

いかがだったでしょうか、楽しんでもらえたら幸いです。

今回はちょっと「アーティム君に頑張つてもらいました、というのもせっかく「閃光」という字を当てたので全琫との中で最高速を誇つてもらいたいんですね。

個人的に、戦闘において一番大切なのは速さと思っているんで。

ではでは今回はこの辺で。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼

模擬戦で失ったエネルギーの回復も終わり、コンビネーションの特訓をする。

相変わらず、俺もラウラも個性がある機体だからこれまた難しいのなんのって。でもまあ、それぞれの個性を生かして戦闘状況を考えるのはこの先ISでは必須になつてくるだろうから、いい経験になる。

段々とお互いの動きにも慣れてきて、いい感じにコンビネーションも取ってきた。多分この練習した後にあのAIC特訓をした方がいいんじゃないのかもしかなかった。

「よし、少し休憩としよう」

とラウラが言つたので、俺は自室へと一度戻つた。

アリーナから寮はちょっと遠いが、こつから唯一の男子トイレに行くよりは断然近い。それにあの封筒の中身も気になるところだ。

第七話  
（紅い左眼と碧い右眼）

自室に戻つて鍵を閉めた俺は、サバイバル用品入れの中からライ

ターを取り出してあぶり出しを行う。

紙を燃やさないように少しコツがいるが……、出来た。

『夕食前、生徒会室に来て』

生徒会室。

つまり生徒会長である更織楯無がいるところ、である。学園の長と自分で言っている彼女がどれだけの実力があるのかが気になるところだが、多分あのラウラよりも強いだろう。

更織楯無、専用機持ちでありながら代表候補生になつていらない人の一人。自由国籍権をこの年で取得していく、それを使しまくっているらしい。

そして、彼女もまた十一月の誕生石に選ばれた人材。<sup>トバーズ</sup>

【霧纏の淑女】  
ミスティリアス・レイディ

彼女が扱うBSISの名前だ。

スペック上では、専用機レベルのISとなら変わりがないが霧纏の淑女には他のISには搭載することが不可能なものが搭載されている。

それが【アクア・クリスタル】である。左右一対の浮遊パーツからナノマシンで構成された水のヴェールを展開することにより、拡張領域に関係なく様々な武器を作り上げる。さらにそれは装甲にもなり、IS全体を包むのも容易である。

彼女の持つ武の才能とも併せて、かなり脅威になりうる。が、今  
のところ敵対勢力でもないので大丈夫だと思う。

多分、アレにはまだまだ不明なところが残されているはずだし、  
今のイズムルートで太刀打ち出来るかと言われば正直勝率は六：  
四……いや、七・三で俺が負けるだろう。いくら音速を超えること  
が出来てもまだそれをものに出来ていない、そんなんじゃ学園の長  
に勝てるわけがない。

が、味方にしておかないと痛い。

BSISは世界に十一しかない。その内一つは姉さんが所持して  
いるし、情報によるとあの組織でさらにもう一つ程所持しているら  
しい。今現在確定できているコアは四つ、確定できていないが敵が  
持っている可能性が高いコアが一つ、残り六つのコアの一体いくつ  
がこっち側に回ってくるだろうか。

BSISではないが、一夏のEISはまた特別だ。あいつも味方に  
つけていた方がいい、一年の専用機持ち全員も交渉対象と考えても  
良いが戦争に巻き込むのは少人数のほうがいい。

「タイムリミットは刻々と迫ってきてるのでよつ……」

だが、今は突き進むしかない。

気持ちを切り替えてアリーナに向かう。

アリーナに戻ると、ラウラはA.I.Cの特訓をしていくところだつた。複数のマガジンを空に放り投げて、それら全てを完全停止させる。いずれ集中力が切れて落ちるがまた放り投げ……を繰り返しているようだつた。

「ただいま」

「ん、ああ。始めようか」

「それにしても、ラウラが弱点を克服しようとしているなんてな」

「私の戦法の幾つかにはこのA.I.Cが用いられている、一対一での効力は凄まじくても一対多の状況でも使えるようにならないとこの先が危ない」

いつもラウラが急な戦闘を用心しているのか、それともこの先の未来を見越しているのかは知らない。たぶん前者だろうが、その心がけは本当に凄いと思つ。

俺なんかとは違つ、戦争への執念みたいなもの。

「本当にラウラは優しいな」

「んなつ、私はただ戦争のためだけに作られ……」

「そんなことはない」

「ラウラの言葉を途中で遮るよつとして俺は言葉を紡ぐ。

「ただ単に戦争に勝ちたいのなら、味方を滅ぼしても構わない戦法

を取る

「アレか

「だが、今回の戦闘でラウラは『民間人、及び味方がいる状況下』での模擬戦を望んだ。つまり、目標に対して攻撃を当てつついかに他人にダメージを与えないようにする動きをしていた

俺が二丁拳銃でラウラに射撃していた時も、ラウラは俺と自分の間に誰も置かなかつた。

「……」

「だから、ラウラは自信持てよ。俺はラウラのこと可信してる

「いいのか?」

「いいもなにも、ラウラはラウラだ。他の何者でもない

「私は、人とは違つんだぞ」

「それなら、俺だつて一緒ぞ」

首をかしげるラウラをよそに、俺は辺りを見回す。幸い誰も見ていないようなので、ラウラに紅い左眼をさらす。

「つ、それは……」

「ラウラの『越界の瞳』<sup>ワオーダン・オージュ</sup>とは異なるけれども、似たようなもんだ。

俺が開放すれば、力を得れる

その時に失った代償として、俺は寿命の八分の一を渡している。  
どつかの死神よりは格安な取引だ。

「何故、お前はそれを望んだ」

カラー「コントラクト」を戻している途中にラウラに問われる。

「俺を必要としたイズムルートに乗るため、そして姉を懲らしめる  
ために……かな」

もう一つだけ理由があるけれども、それは今語る必要はない。

「……強さとは、何だ」

「いきなりなんだ。だが……そうだな。使うべき力を使いつべき時に  
キッチリ使えること、かな」

形振り構わず力を放つてしまえば、それは暴力となら変わりな  
い。

力を持つていても使わざじまいであれば、それは宝の持ち腐れだ。  
そういうコントロールがキッチリできっこそ、その力は強さへと  
転化される。俺はそう思つている。

「ラウラにはラウラの意思が、俺には俺の意思がある。そして持つ  
力は人それ違う、だから力は使いどころで様々な形を作るんだ」

「私は、まだ遠いな」

「俺だって、まだ遠いさ。だが、強さに『ゴールなんてない。走り続ける』こと、突き進み続けること、その一瞬一瞬をかみ締めて強くなつていくんじやないか？」

「それが、お前の強さか

「まあ、そんなもんかな」

ラウラはふつ、と少し笑うと。

「私の強さは間違つていたようだ、力を得るだけでは意味がない……。お前に教えられたよ」

そうこのラウラの瞳は今までで一番輝いていたように見えて。

その表情に、思わずドキッとしてしまつていた。

特訓も終わり、後は夕食を残すだけとなつた。が、俺は生徒会長さんからの呼び出しで生徒会室に来ていた。

「ハハハハ、ヒノックを三回じてお前と事件を語り合すべく通された。

「はあい、待つてたよ」

ドアが閉められてから、樋無さんは話始める。

「どうしてここなんですか？」

「ん、まあ秘密情報だし。それに……」」なら監視も盗聴もないし

声色が変わった、さつさまでのむけやらけた感じよりも何段階か  
眞面目になんた感覺。

「その用件とは？」

「君、その左眼見せてみてよ」

カラー・コンタクトであることは、既にバレていたようで俺は素直  
に従うしかなかつた。

「ふうん、結構綺麗だね」

「俺にとつちや、ただの悪魔との契約の証ですよ」

「それで、君は絶大なる力を得た」

「……そんな大した力じゃないですよ」

「人並み外れた身体能力、動体視力に加えて脳細胞の活性化」

「よく調べましたね」

「まあ、悪魔と契約した人のほとんどがこれを見んでるからね。さ  
らに君は特殊な契約も結んだ」

そこまで知つてゐるのか。

「過剰なまでに君は『速さ』を求めている、それは君がロシア軍で訓練していく時から明らかだわ」

「ちょっと待ってください、俺はロシアにいきましたが軍と関わ  
りはもってない」

俺の記憶をたどってみても、俺は軍にいた覚えはない。

「そのために呼んだ、とも言えるわ」

# 「一体何が……」「

言いたいんですか、そつとおひとしたが口からは出てこなかつた。その代わり、俺の目の前にはエスを部分展開させている樋無さんがいた。

「私は真実を知りたいの、ゴメンネ」

半透明だった水が、紫、赤、緑、黄……様々な色に変色していき、気がつけば身体の中に入っていた。身体に異物が入ってきたのを感じて凄まじい吐き気を催し、すんでのところで自意識を保つ。

力を解放した時と同じように何かが身体に流れていることを感じるが、今は嫌悪感も感じる。それと同時に、頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられているようじごぐると回る。

そこに自分はいるはずなのに、自分が自分じゃないような感覚。

『おかえり』

自分の姿、自分の声でそう告げられる。意識が朦朧としていく中で、それだけがハッキリと聞こえる。

一体何に対しても俺はそう言っている？

一体何故俺はこうなっている？

それ以外にも様々な疑問をもつたが、それを考えるだけの余力はもう残っていない。

俺は意識を手放した。

最後に、自分の姿をした紅い両眼の少年の笑みを脳裏に刻み込んで。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼（後書き）

いかがだったでしょうか。

ちなみに、容姿のイメージは皆さんのご想像におまかせしますが、自分はエヴァのカヲル君（瞳だけ色違い）をイメージしています。

さて、今回はまた新たな事実が発覚。樋無さんのISSをBESISとすることにしました。設定的には本編とそう変わりないですが、色々とスペックだつたり特殊効果だつたりが後付けで強化されていく感じです。

そしてラウラちゃんに対してもフラグをちょいちょい立ててみましたが、どうだったでしょうか。その辺の感想もいただけるとうれしいです。

次回は主人公の過去を少し明らかにしちゃいたいと思います。

## 第八話 虚栄だった眞実

「どうしてそんな顔をしているのです」

「……ボーテヴィッシュか」

「さつきの訓練では好成績だつたじやないですか」

「あんなもんは意味がない、実際の戦争ではもつと厳しい状況下で戦わなければならぬんだ」

「なら何故……」

「俺は決めたんだ、姉さんを倒すこと。だからそのためなら何だってするさ」

「戦う」としか、自分を実感できない?

「よく覚えてるじゃないか

「少佐の言ったことは、忘れないって決めましたから

「そりゃ、ありがとよ」

第八話

（虚影だった眞実）

今は……、ロシアでの記憶、失っていた、いや封じられた記憶。  
最低でも俺とラウラの両名の「」の封印にかかっているだろう。

いや、これは俺が望んだことなのか？

『おえい』

「……」

田の前には俺がいる、瞳の色だけ違つて後は全部が俺。

『久しぶり、ですね』

急に久しぶり、なんて言われても……。いや、一つだけ心あたり  
がある。

「クロノーチェカ？」

『当たりです、よくも代償を……』といつても今の私には必要なかつ  
たので手放しただけですが

「どうこうことだ？」

『もう既に、検討はついているでしょう』

「……すまない」

『構いませんよ、どの道を進んでもこうなることは分かつてました  
から』

「じつこいつだ」

『始まるんですよ、私の大好きな大きな戦争が、……』<sup>プロシティ</sup>

「そんなに迫つてきてるのかよ」

あれから既に五年は経つてこる、しかしこいつなんぞもいの戦争  
が起ころることは確定要素がなさずである。

アイツらだつてこんな速い展開は望んじやいないのか？

『でも関係ないね、貴方と私なら』

「全では、一瞬だからな」

『くくく……、あははははは。せっぱり貴方は面白い、いや私  
を楽しませてくれる。君がエメラルドと共にある時かいづとね』

「なんとも言えぱいい、俺は悪魔落ちなどしない。俺はあくまで  
も俺だ」

『私だつて貴方を悪魔落ちさせぬ気はないぞ、寧ろ共存を望んでい  
るんだ』

「共存？」

『せじすめ三位一休むか、貴方と私と彼女の』<sup>ヒート</sup>

「……面白一」

『それに、君の身体を借りることで私に生じるメリットもある』

「まだ生きる気かよ」

『貴方には分かりませんよ、長く存在し続けることの樂しみを。世界が変わる瞬間を叩きし続ける』ことが出来る樂しみを』

「それがたまたま今回だつただけか」

『そうですね、今日は今まで一番強力な変化だ……貴方に感謝しないと』

「で、再契約にかかる代償は幾らだ?」

『既に頂いています、"十一月の誕生石"の選別者からね』<sup>トパーズ</sup>

「そうか、つて樋無さんが?」

『何度もやうだといつのか』

「どうことじだ?」

『ええ、なんら変わりない……。しかし言つなりば、誕生石の連中もこの状況は初めてのようだ』

『どうことじだ?』

『「JのIDSを用いた世界はどの輪廻にもなかつた、だから連中も期待していますよ』

『インハイニッシュ・ストライプス

「勝手にされても困るんだが、第一俺がすることはただ一つだ

『そこ』が私との意見の相違なんですが、なんとかなりませんか?』

「残念ながらなんねえよ、これは俺の信念だ

『“誰一人として殺さない戦争”……正直無理があるんじゃないでしょうか』

「だからこそ、速さを手にした。後出しでも間に合へばこの速さを

『確かに、今の貴方は音速を超える速さを手に入れました、ですがそれでは届かない手もあるのでは?』

「……」

『まあ、いいでしょう。貴方も戦争を味わった一人です、そしてこれを見れば気分も変わりますよ』

「ありがとう」

『いえいえ、例には及びません。私が望むのは変化と戦争、それも大きいければ大きい程良い。貴方はそれを私に与えてくれると信じていますよ』

「期待に添えるかどうかは、真実を知つてからだ……」

『お見せじましょ、真実を。そして嘆くが良いでしょう、喚くが

良いでしょ、昔から決まっていますよ……知らないほうが良かつたことの方が多いことを『

あの当時の俺は、ただただガムシャラにもがいていた。

事件の後、父が作っていた一機のHSについて知った。

一つは、後に俺のBSIHSになる五月の誕生石のコアを持つイズムルート・フスピイシカ。もう一つが四月の誕生石のコアを持つ姉さんのBSIHSだ。

女である姉さんはもうこの時期にはBSIHSの適合者として誕生石から認められていた、そして母さんは姉さんが操るBSIHSによつて殺された……。

その時の姉さんの表情は忘れる出来ないだろう、いや、しないのだ。このことを胸に刻み続けていつかは姉さんに分からせやる、あの行いがどれだけ愚考だったことを。

流れしていく真実と自分の虚影を重ねながら、自分の半生を振り返る。

その日は生憎の雨だった、日本では超大型台風が接近しているといつもコースがひつきりなしに流れつづけていた。

俺は台風が怖くて、あの時代では珍しく大型シェルターまで前日から避難していた。

「いろいろ台風が接近していても、流石にこの子の手入れは済ませておかないとね」

そこにあつたのはロシア代表であつた母さんのヒルー凍える風ヴェーチュリオ・リヨートウ、母さんはクリスタルのペンダントとして首から下げていた。

母さんのポリシーとして、『自分を支えてくれることへは最大の感謝を』というのがある。それだからこのHISの手入れというのは、母さんにとつてヴェーチュリオに対する感謝の表れなんだと思つ。

「僕も見ていていい?」

そして、そんな母さんが大好きだった。

「いいわよ」

母さんが作業している隣で、邪魔にならないように眺める。自分がどうやっても動かせるものじゃないことを理解していた、だけれどもエトと/orのには凄い興味があつて暇さえあれば色々と調べていた。

「かつこいこね、やつぱり」

「将来はヴァーディムが母さんこへうをプレゼントしてくれるのかな?」

「ううん、僕はね頑張って男の子でも乗れるエスを作つてみたい」

「……そつか」

「それで空を自由に飛んでみたいの」

「アリサと一緒に飛べるといいわね」

「……お姉ちゃん、まだ帰つてこないのかな」

「本当に、心配……」

「そんなに心配してた?」

「お姉……ちやん?」

エスを展開していた姉さんがいた、だがそれが姉さんだとは信じれなかつた。

そこにいた姉さんは、瞳の色が逆転していた。白い瞳孔が見開かれ、狂つたような笑みを浮かべている姉さんは、当時の俺にとつては恐怖でしかなかつた。

「ヴァーティム、逃げなさい!…!…

「強制停止

フローズ

逃げようとしても、逃げれない。

足が全く動かない、口を開こうとしても開けない。

「あはははははははははははは、いい顔してるよ♪ターディム。でも、もつともつとイイ表情見せてほしいな」

その言葉を発し終えてから、姉さんは一本のナイフを投げた。

全ては、一瞬だった。

「ハハハ……」

母さん？

「めき声しか聞こえない、母さんがどうなっているのかもわからない、ただ一つ分かるのは……」

「やっぱ変わらないな……って、強制停止させてるんだったね」

わざわざでなんともなかつた姉さんが、アカ色の斑点をつけていたことだった。

「んじゃ、ガアティム。君は運命から逃れることは出来ないの。ハメンネ、でも恨むなら……その人を恨みなさい」

「母さんが何をしたつていつのせいか……」

叫んでも、喚いても、涙を流しても、何もない。

既に母さんは息をしてなかつた、だけれどもあの頃の俺には何も分からなかつた。ただただ、あの時の姉さんの姿がエンドレスループしていた。

事件の後、父が作っていた一機のISについて知った。

一つは、後に俺のBESISになる五月の誕生石のコアを持つイズムルート・フスピイシカ。まだまだ実践投入見込みは低かったが、この時点でイズムルートは俺を選んでいたらしい。

もう一つが四月の誕生石のコアを持つ姉さんのBESISだ。既に実用化がほぼ期待されていて、姉さんがいつ乗つてもおかしくない位だった。

その姉さんが事件の数日前に行方不明になって、それと同時に父の研究所からイズムルート以外の全てのISが盗まれた。

明らかに、何かが仕組まれている……今となつては分かるが正直あの頃の自分はまだまだ幼かった。

この後俺は父に引き取られてロシアに行き、そこで母さんが入っていたロシアで一番のIS軍隊で訓練をしていた。

一年も経てば、次第に戦いとは何かを学んでいき自分なりに戦いにおいて速さが一番必要だという結論を出していた。そのころから、イズムルートの基盤が出来てきて次第に自分に馴染む様になつてきた。

ここから、俺の真実だと思っていたものは全て虚影だった。

だつてそうだろ？

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。階級は少尉だ」

全ての歯車は、今ようやく意味を成す。

## 第八話　虚栄だった眞実（後書き）

スイマセンっ、一話じゅり收め切れません。  
という訳で、過去編に突入します。

最初からちゃんとプロットきっちり立ててれば、こんなに早い段階で過去編に入らなかつた……。

と今更嘆いてもしかたがないのでここは頑張りどころです。  
さて、今から始まりました過去編ですがコンパクトにまとめたいと思ひます。

多分後二~三話内には終わるんじゃないかと予想しつつ。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ

「そう言えば、今日は大佐が昼食当番でしたね」

「厳密に言えば俺のグループだが、どうした？」

「いえ、今日は金曜日なものですから」

「そうだな、金曜日はカレーの日だ」

「……大佐からしてみれば毎日がカレーの日では？」

「それも一理あるな、それに金曜日がカレーなのは確か海軍発祥だ」

「勉強になります」

「それにカレーは良いんだぞ？ 栄養もたくさん取れるし、色んな種類があつて楽しめるし、何より……」

「大佐、そろそろ昼食準備を」

「そんな時間だつたな、では済まないな、ボーデヴィッシュ」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。階級は少尉だ」

何故ラウラがこのロシア軍に？

「今年いっぱい、このロシア軍のIIS隊で軍事指揮をとつてもう一つこととなつてこる。歳はまだ若いが、IISのセンスや戦闘知識はかなり高い」

今のラウラとは違つて、まだ眼帯をしていないラウラ。その綺麗な赤い双眼に見とれながらも、俺は真実を見続けた。

「俺は日騎ヴァディム、階級は気味と同じで少尉。とまあ、一年よろしくな」

挨拶が終わつて手を差し伸べたが、その手はどうれる事はなく。

「……」

ラウラはとどけにかに行つてしまつた。

「何か悪い事しましたかね、俺」

「さあ？ それより、自分のIISのチェックを行つてね。本日はほぼIISの訓練だから、自主トレつてことで」

「了解です、准将」

それから俺はイズムルートのチェック（順々に出来上がつていいく機体を見るのは、中々に面白い）を入念に行い、自主トレに移行す

る。

今はまだ、イズムルートが完全に動かないの俺はこうこう地道な訓練を積み重ねる必要がある。

そしてその自主トレ中のことだった。

「ちょうど、お前さん」

極寒の地とも謳われるロシアでの長距離ランニングでいつも口号を回っていた俺に、とある老人が声を掛ける。

この老人を俺は知っている、見た目よりもかなりの年数を生きながらえているクロノーチェル。その仮初めの姿だ。

「俺のことか？」

「そうだ、お前さんだ。ちょうど時間はあるかね」

「はあ、別に暇なんでいいですけど。……今日ちょっと楽をすることにしよう

「それがいい、寒いから家にどうだい？」

もしかしたら拉致監禁されるんじゃ……とあの時も思ったが、ロシア軍の少尉ともある者がこんな老人に拉致監禁されたんじゃ俺の顔が持たない、とも思い、その考えはすぐさま却下した。

老人の家には何やら変な文様が家中に散りばめてあって、なんだか気味が悪かった。

「ああ、そこには座るがいい」

「ありがとうございます」

椅子を用意してもらい、それに座つてから辺りを見回して警戒する。盗聴、監視、それらの類があるかないか位は大体察しがつくが、この家からは感じなかつたのでとりあえずは少しだけ気を緩める。

「さて……話なんだが、お前さん、力が欲しいとは思わないか?」

「力?」

「一目見て分かる、お前さんは心に多大な闇と憎しみをもつてゐる

「つ、それがどうした」

「今のお前さんは何も出来やしないよ」

「あんたに何が分かる、今の俺はあの時とは違つ。それにもう少しすれば……」

「五月の誕生<sup>ハメラルト</sup>石の力を手に入れる?」

「……何故それを知つていい」

「何、伊達に輪廻を何度もぐぐつてきつてはないと」

何を言つてゐる?

今の俺には分かるが、先ほども言つたがこいつが時を司る悪魔。

「どうだ、一つ契約を結んではみないか」

「契約……」

「そうだな、お前さんの寿命を八分の一程寄越せばいい。それだけでお前さんは人を超えた力を得る」

「……」

普通なら信じられないだろう、いや、普通なら信じないだろう。こんな奇妙な老人と契約？

そんなことをしただけで得られる力なんざしたいしたことがない、と大多数の人間が思うことになるだろう。

「分かつた」

だが、俺は力を欲した。

相手はもはや人ではない、ならばこっちだって人じやなくてもいい。悪魔に魂を売つても、別に俺は構わなかつた。

もう母さんは戻つてこない、あの日常は帰つてこない。

「俺は力が欲しい、たつた八分の一の寿命なんざ支払つてやる」

『やつぱりいつみてもここの貴方は面白い』

こきなりなんだ。

『いや、君が眞実にひれ伏すといふを觀に来たんだけれど』

俺は決めたんだ、眞実からは逃げないと。

『それはそれでいいんですが……あ、契約が始まりますよ』

『……分かった、それでいい』

『勿体無いのう、そんなに綺麗な瞳なのに』

『なら変えるか?』

『くく、全然その気はない。寧ろ楽しみだ』

『ふん……まあいい』

老人が俺を中心として魔法陣を書き始め、そのまま契約の言葉を紡ぐ。

『頃合を計らい、俺も契約の言葉を紡ぐ。』

『契約、我……生命を捧げ、我が身を捧げよ!』

『ブティッシュ・チャーニー・ク・ヴァミア  
承認した』

その刹那、書き終えた魔法陣が俺の身体に張り付き、からにじみる

どん上に向かっていく。何かが蝕まれる、どんどん混ざっていく。

「ぐつ、あぐがあああああああ……」

それらは最終的に左眼に集約されていく。

多大な痛み、どの拷問よりも強い痛み、そしてそれとは別に確かに感じる身体に流れる自分とは違う何か。

「ほう、これはこれは……」

数分後、痛みに耐えた俺は老人、いや、もう一人の俺をみた。

「なつ、姿が」

「いやあ、感謝しますよ。この身体は引き締まつていていい

明らかに口調が変わっていて、それはさながら紳士のようだった。

「一体何が起つてこる

「一言で表すなら、輪廻……ですね」

「世界は輪のように回り廻る、それが輪廻」

「よく分かりましたね」

「それにしても、なんだか自分の身体じゃないくらいに重いんだが」

「貴方に八分の一程悪魔の血を流しましたから、慣れなくて当然で

すよ

「はあ、やつこつ」と叫めて言つてくれよ

「いやはや、ですがそれでも貴方は契約を施す……違いますか？」

「……」

肯定する代わりに、無言で辺りを見回す。

身体能力の向上、および動体視力の強化と脳細胞の活性化。力を解放することでそれらは発揮されるが、普段の行動でも今までよりかは大分変わつてゐるらしい。

それと後二つ、時間を少しだけ止める力と自分自身の記憶を封印する力。

前者は、時クロノーチェルを司る魔との契約では絶対というほどに必要な力なんだそうだ。なんでも、一回で三秒止められるらしい。三秒って、なんだか短いような気もしないこともないが実際は結構長いし、今となつては音速への移行までの時間を稼げるのでいい。

そして後者は、なんか必要になるときがあるらしい。そしてその力を利用していることから、あいつの言つたことが正しかつたといふことである。

それに支払つた代償は、寿命の八分の一。そして契約した証として左眼に刻印を押され、俺の左眼は紅く染まつた。

「では、来るべき時にまた逢いましょう

「ああ、分かつた」

気がつけば、俺は最初にクロノーチェルに声をかけられた場所にいた。

狐に包まれたような感覚だったが、ガラス越しに見た自分の瞳を見てこれが真実だと知つた。

このまま軍に戻つても怪しまれるので、コース上にあるレイヤー御用達の店でカラー・コンタクトを買った。試しに付けてみたが、違和感はそつなかつたのでこれで行くことに。

「只今戻りました」

「おお、ヴァーティム。いいところに帰つてきた」

「一体何が?」

父は嬉々とした表情を浮かべて、俺に近寄つてくる。

「完成したんだよ『翠玉の閃光”<sup>イズムルート・ファイシカ</sup>”が

父に連れられてみた、イズムルート。

初めての感覚……とは言いがたかつた、以前に感じたような感覚?

いや、前の適合者達の感覚かもしれない。輪廻により繰り返され、

より進化するように仕向けられてしまう世界、世界支配の神の強欲のままの完全なる完璧になるような世界。

まだ輪廻の途中ならば、運命はまだ決まっちゃいない。輪廻の収束、それを告げる鐘さえ鳴らなければいい。

「これが、俺の……俺の翼」

「ヴァディム、本当にすまない」

「いいよ、気にしないで。俺は俺の意思で戦うし、それになにより五月の誕生石は俺を選んだし、四月の誕生石は姉さんを選んだ。これだけでもう十分に俺がイズムルートとともににある条件は揃ってる」

「しかし……」

「今更何を言つのや、父さんは東博士が託したコアを撫で下にするのかよ」

「……」

「父さんとして、科学者として、最高だよ本当に……そつ思つていい俺の気持ちまで無にするのかよ」

「俺はお前が……」

「大丈夫だよ、俺には母さんの血が流れている。それにイズムルートだつてある」

「……分かった。今からイズムルートについて説明する

これが、俺が輪廻の歯車として動き始めた瞬間でもあり、俺の人生の一番のターニングポイントでもあろう。人の皮を被つて、俺は生きる。

全ては、その一瞬のために。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ（後書き）

いかがだったでしょうか、第九話です。

ちなみに、この作品で扱われる悪魔や神々やは実際の名前からちよこつともじつものが多く、正式なものとちょっと違つてその辺は許してください。

さて、今回はオッドアイになる経緯を書いてみました。

個人的に、かなり厨一臭くしてみたんですが……、どうでしょうか？

この過去編はコンパクトにまとめるに決めたので、ちょっと中身がスカスカしますが、『ご愛嬌』ということで。

これからのストーリーにも関わってきますし。

この過去編もいつか当時のヴァーディム君の視点でしつかり書ければいいなと思いつつ。

ではでは。

## 第十話 囚われの過去

「大佐は、どうしてエリに乗るんですか」

「まあ、空だつて飛べるし」

「やつこにことを聞いているんではなくて……」

「あまり人のことを詮索するもんじゃない、ボーデヴィイッヒ」

「は、はい。申し訳ござりません」

「やつこまでかしらまらないくともいいけれど、これ聞くにはまだ早い」

「まだ？」

「言つべきときがくれば、俺から言つよ。……だから、待つてく  
れないと」

第十話  
～囚われの過去～

「今日はイズムルートのデータ収集の日でしたっけ?」

「ん、ああそうだった」

「少佐、ボーデヴィッシュヒと模擬戦してみてくださいよ」

「ええつ、なんか企んでない?」

「そんなことないですって、それに少佐もボーデヴィッシュヒさんも今のところ負け無しんですよ」

「どう考へてもボーデヴィッシュヒが勝つじゃないですか」

「少佐……。やうなからたら今度からカレー停止にしてしまいますよ、私のコネで」

「よおし、気合入れて頑張るぞー」

「そこまでカレー好きなんですか」

「ああ、好きだ」

「…………、ひとつ行きませうよ」

「お、おう。つてなんでそんなに顔が赤いんだ」

「氣のせいですかー。」

そんなこんなでスタジアム。事前にイズムルートのチェックは全て終わらせているし、今日は俺の気分も結構高ぶっているから良いデータがとれるといいんだが。

「……始める」

「ああ、よろしくお願ひする」

開始の合図と同時に、俺は一気に間合いを詰めて打鉄用ブレードで切りかかる。

「温い、温する」

「つ……」

見切られた俺の攻撃はA.I.Cで簡単に停止する。

「動きが単調すぎる、だから私に気づかれる、攻撃を許す」

大型レール砲<sup>カノン</sup>の装填が確認され、それが俺に向かって放たれる。

声を出す暇さえなく、俺はスタジアムの壁に突きつけられる。シールドエネルギーは今まで三分の一も持つていかれ、正直愚かとかいいようがなかつた。

「まだまだ、これからだろ」

「少しばくを楽しませててくれ」

「じゃあ、まずはこれからだ」

現在の俺の十八番でもある連続瞬時加速<sup>マルチ・イグニッショントースト</sup>を用いて、不規則な移動を行ながラウラに近づいていく。

「これならAICにロックされることもないし、何よりハイパーセンサーを勝る機動力があるので攻撃開始にはもつてこいだ。

「だから温いと言つているだろう」「元

……それも今のスペックなら、の話だつたようだ。どう考へてもこの時期ではイズムルートはまだ完成といつても、プロトタイプがという意味で使われているに違はなく故に改良を重ねていた。

というわけで、簡単にAICに絡めとられてはいる俺。なんというか情けないねえ、本当に。

「なら弱点を突くまで」

先ほど吹つ飛ばされたときに設置しておいたC4爆弾を爆発させる。

「ひあっ」

一瞬集中が解けたのか、AICが解除される。その隙をついて俺はブレードで切りかかる。

「卑怯だぞ」

「なかなかに可愛かつたぞ」

「かつ、ふやけるな……」

とりあえず一撃は入れることが出来たが、それ以降は体制を立て直したラウラに全て止められていた。

その隙にまたC4を設置しておぐが、JETはAICOを発動してこない。

「お得意のAICOはビックリした？」

「同じ手には一度と引っかかるが、貴様にハンマーをやめないと困ります」

「そんなにビックリするもんなのか？」

「ふ、普段なら問題ない」

その言葉は多分本当だろう、AICO中は意識を集中せりてから聴力とかも敏感になるんだろう。

「まあ、AICOを使つてくれないのならJETも勝手がつく」

連續瞬時加速を行い、C4をばら撒きつつJETと接近する。

「同じ手は一度も通用しない」

「これは悪いが俺の戦い方なんですね」

今度はアサルトライフルを構え、攻撃する。

「ふん、甘いな」

軽々とその弾の雨を避けて、JETは逆戻りで接近する。

「お前も近接のほうがいいだろ？」「

「ありがたいことだね」

ブレードを展開して、立ち向かう。向こうはプラズマ手刀を展開している。何度も鍔迫り合いを行い、互いの力量を測る。

「ふん、こんなものか……」

そういうて離れて、ラウラに對して俺は空のマガジンを放り投げた。

「つ、C4か」

「残念、ラフでした」

一瞬気が緩んだのを見過さず、連續瞬時加速から攻撃を行う。その攻撃中も加速を続けて、ラウラを地面に叩き落す。

「なかなか面白くなつてきたじゃないか」

「全では、一瞬だ」

「何を言つている

ラウラの興がそがれない内に、俺はあらかじめばら撒いておいたC4を全て爆発させる。

「なつ、まさか」

その上、俺はガトリングガン一二を取り出してラウラに放つ。

爆風にまみれ、尚且つ空から振る鉄の雨こぼ流石のラウラでも対応し切れなかつたようだつた。

ふうむ、じうじう戦い方もあるのか。参考になつたな。

『そこまで、もうここぞ一人とも

』「解、父さん」

「ま、待てつ」

「ボーデヴィッシュ?」

「……今度は負けない」

「ああ、また相手してくれると助かる」

この模擬戦がきっかけとなつて、俺はラウラと仲良くなつた。元気なつた。

「大佐つ、今日もお疲れ様です

「ボーデヴィッシュも、お疲れ様」

あれから半年、俺は大佐までラウラは少佐まで昇格していた。後数ヶ月もすればラウラは自國であるドイツへと戻っていく。それでも、一番の収穫は自分には戦うことしか出来ない『人形』だと思い込んでいたラウラが普通に隊の皆とも話が出来るようまでになったことがあげられる。

どうしても俺が記憶封印を行つた理由が未だ見つからない、とうよりかは寧ろ良い方に向かつてないか?

「ボーデヴィッヒ、今日はお前が食事当番だったな」

「はい、今日はシチューです」

「そうか、今日の晩飯はシチューか」

「いえ、昼食ですけど」

「……この際は何でもいいか」

「何かいいましたか?」

「い、いや。何も言つてないぞ」

「大佐っ、今日はありがとうございました」

「俺のほうこそ、これでまたイズムルートも喜ぶぞ」

とある日の模擬戦が終わつて、ラウラと話す。基本的にはずっと

ラウラと一緒にいて、なんだか初々しいカップルみたいで自分のことながら微笑ましくなっていた。

そして、徐々に速さを増していくイズムルートが現在の形に近づいているのを見て、感動をしつつ。

「日を増す」ことに速くなつていつてる感じがします

「そうだな……イズムルートがそれだけ高みに生きたい証拠かもしれないな」

「HSに意識など存在しえるんでしょうか」

「あな、だけぞそうだつたらいいなと思つんだ。俺は」

「それは何故ですか？」

「一人で戦うより、一人で戦つほうがいいじゃないか。精神的にも」

「なるほど、大佐らしいですね」

「俺らしい、か。それが一番しつくり来るならそれがいいだろ？」

「はいっ」

「大佐……、今までありがとうございました」

「ユウト、ボーデヴィッシュがいてくれて凄い成長出来た気がす

るる

丸々一年が経ち、ラウラがドイツに帰る日の前日。ロシア軍では「ラウラの送別会なるものをしていた。

最初は誰とも接しなかったラウラは、今は皆と一緒に笑えるようになってしまった。

「ENの一年、本当に色々とありました」

「ああ、そうだな。始めの方はボーテヴィッヒは凄い冷たかったからな」

「う、申し訳ござりません」

「いやいや、いいんだ。今は違つだらう?」

「はい、本当に大佐には感謝してしましきれません」

「俺だけじゃなく、隊の皆さんも感謝すべきだな」

「は」

「今度、俺もドイツでのボーテヴィッヒを見に行くから

「本当にですか」

「ああ、本当に。それにドイツの力も推し量れる」

「私はっこですか……」

「冗談だ、お前に会うためにドイツに行つてやる」

「大佐……」

「はいはい、ラブコメはいいから。今日は楽しんじゃいましょう」

ラウラが旅立つてから早一ヶ月、俺はドイツへと旅立つた。ロシア軍からの命令があつたので、という建前を連れて。

だが、そこで俺が見たのは惨劇だった。

「この度はござりござりござりしゃいました、日崎大佐殿」

「そんなにかしこまらなくともいいですよ、俺はそんなに偉くはない」

「いえ、これはわが軍のポリシーですか」

「ボーデヴィッヒもそうこうとこひは聞かなかつたからな」

「……その件なんですが」

「少佐つ、大変ですつー」

「何をしている、今は大事な会談中だぞ」

「申し訳ございません、ですが遺伝子強化試験体が暴走を」

アドヴァンスド

「番号」は

「C-0037」です

「どうかしましたか？」

「いえ、いつもで実験中のIJDが暴走してしまったみたいで

「なんならお手伝いします」

「それはありがたいんですけど、いかんせん条約に反する可能性が」

「条約？ ああ……何も見なかつたことにしてくれると助かる

「……すみません」

「何のことでしょうが、俺はこのイズムルートの試運転に行くだけ

ですよ」

「行かなければよかつた、そう思つたときには既に遅い。

後に悔やむから後悔なんだ、先にあるはずがない。悔やむのはいつだって何かが起こつた後、そして無力な自分に憂いを感じる。

ボーデヴィッヒ、お前は何故そんな顔をしている？

何故そんなところで騒いでいる？

俺は何故、こんなにも無力なんだ。

## 第十話 囚われの過去（後書き）

いかがだったでしょうか。

次でこの過去編もファイナーレを迎えます。

さて、戦闘させてみました。

なんかちょっとチープな感じになつたかも知れないですが、そこはあえてそうなるようにしました。臨場感があまりないような感じの戦闘、と思っていただけると幸いです。

次も戦闘ですが、こっちの方は頑張つて臨場感が伝わるようになつに頑張りたいと思います。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼

「なあ、ボーデヴィッヒ」

「なんでしょうか」

「ここの間、聞いてきたよな。『どうしてヒリに乗るか』」

「はい」

「聞かせてやるよ、その理由」

「……はい」

「俺は、復讐をするためにヒリに乗ろうとしていた。だけどな、そんなんののためにヒリを使っちゃいけないって気がついた、これは人を陥れるこの出来る凶器もあるが、人を守ることの出来る希望もある。ならば俺はその希望の方を選ぼう、とまあそんな感じだ」

「人を守るため、ですか」

「ああ、ボーデヴィッヒやこの軍の皆。それ以外にもたくさんの人々を守るために」

「良い決意ですね」

「そつだろ、これがあつたからこそ俺はここままで生きてこゆし、これからもそつして生きていく」

## 第十一話

～真紅の双眼と黄金の左眼～

暴走を始めたラウラは俺が見たこともないぐらいに狂氣に満ちていて、そして尚且つそれは自然と“鬼人”を連想させた。……いや、もつと言つならば“鬼神”だろうか。

「なんだよ、アレ」

「遺伝子強化試験体C-0037として……」

「そんなことを聞いてるんじゃな～」

「何をそんなに怒り狂つてるんですか」

「何故、ボーデヴィッシュがあんなになつてるんだ。それに左眼が金色になつているのも氣になる」

「ボーデヴィッシュ……？ ああ、あの“マリ”の名前でしたね」

「マリ……肩だと？」

「ええ、ヴォーダン・オージュ越界の瞳適合前と後じゃ天と地の差だ。あんな肩、本當はすぐに処理すべき……」

「ふやけるなっ！」

俺は思わず相手を殴ってしまった。いや、殴らずにはいられなかつた。流石に今の俺でも殴りはしないが、結構腹が立つ言葉だな、おい。

「ボーデヴィッヒは戦うための道具じゃない、お前らの人形でもない。俺が、俺が……」

「まさかアレに惚れたのか？ ふん、馬鹿馬鹿しい」

「つ……。ボーデヴィッヒを、ラウラを返してもらひつ」

「処理していただけると、ありがたいんですけどね」

「アジン、ドウガタ、トウゴー」  
「つ、一ツ、三ツ……。」

瞳を閉じて、『俺』はそう心の中で呟いたのだろう。次に眼を開いたときには、両眼が赤く染まっていた。

「……失せろ、俺が気分を害さないうちにな」

「は、はい……」

『Jの時の貴方は本当にカツコよかつたんですけどねえ』

この先を知つていのなら、少し黙つていてほしい。今の俺の判断が正しいなら……いや、多分『俺』は負けるだろう。

その理由は明確だ。Jたちも越界の瞳に対抗すべく、力を解放し

ているが……かなり分が悪い。まず、相手がラウラだということ。  
そして次に俺はラウラに一切危害を加えずに助けなければならぬ  
こと、最後に、今までのラウラより各段に強くなっていることが挙  
げられる。

『それで、今の貴方は臆しますか？』

いや、全然。

そして、この時の俺も絶対に同じ考え方だらう。ラウラに惚れてる  
なら、尚更だ。

『いまどきにしては珍しく、貴方は好きであることを恥ずかしがり  
ませんね』

ラウラだから好きと。俺はラウラだから好きなんだ、胸を張  
つて好きだと言えるんだ。

「今、助けるよ。……ラウラ」

真紅の双眼が暴走しているラウラを捕らえる、トゥリー・セクーンダ三秒ルールが使え  
るのは七回。

その七回が結構重要な一つである。その七回を活かせないと…

…。

「三秒ルール」

『早くも一回目、発動しちゃったねえ』

まずは一度様子見で使うのには悪くないが、それも期限があるものに使うのは解せない。三秒なんてすぐに終わるぞ？

と思っていたが、結構甘かつたようだ。考えもなしに突撃するような馬鹿じやない、自分の事ながらそう思いたい。

イズムルートの機動力を利用して、一秒立たない内に後ろに回りこみ、そこからアサルトライフル二丁で連撃を加える。

すぐに三秒が経つが、ラウラに結構なダメージを貰えられたはずだったが、それも空しく。

「はあっ？ 今のでシールドエネルギーを250程度しか削れてないだと？」

普通ならばあの攻撃はシールドエネルギーを半分削るには良い攻撃なはずだったが、その半分程度のダメージしか通つてない。

「ヌルイナ……」

「くっ、一寸離れない」と

AICOを警戒して、ジグザクに後退したがその必要はないみたいで、今のラウラにはAICOを使う気配が見られない。暴走しているというのもあるのか？

「オソイ……」

「マジかよつ」

と、次の瞬間には眼前に迫るラウラ。先ほどまで狂気に満ちて叫んでいたとは思えないほどに冷徹な瞳と、冷淡な声。

だが、それから感じられるのは多大な殺戮の感覚。

「コロス、コロス、コロス……」

「ぐつ、あがあ……」

殴られ、蹴られ、切られ、撃たれ。

様々な攻撃を加えられて、俺もイズムルートもボロボロだった。今までこんな敵に出会ったことがない。

見ていられないほどに、圧倒的な暴力。機体維持警戒域はもう既に超え、操縦者生命危険域へと突入する。

それでも尚、攻撃を続けるラウラ。

何がこんなにもラウラを苦しめる、何でこんなにラウラが苦しめられる?

「三秒……ルール」

それを駆使して、逃げるのが精一杯だ。その三秒ルールでさえ、後一度しか使えない。

「瞬時加速すら使えないか……な」

何を考えたのか、三秒間で『俺』がしたことはただ一つ。

『ひゅう熱いねえ』

ほわけ。

「ナン……ダ？」

「ラウラ、済まなかつた」

ラウラに抱きついていた。

「お前を苦しめてしまった、お前を助けてやれなかつた。俺は無力だ、本当に肩だ。だからお前に泥を塗つてしまつた、お前を傷つけてしまつた」

「口ロ……ス、口ロス」

無常にも、ラウラの攻撃は止まらない。が、その手は徐々に弱くなつていつている。それに『俺』が抱きついているから、強い攻撃も打てない。

「もつと早く、来ればよかつた。いや、もつと早く伝えておるべきだった」

「ハナセ、ハナ……セ」

「好きだ、ラウラ」

「タイ、サ……？」

「ああ、俺だ。田崎ヴァーティム、ロシア軍特別IS部隊の大佐だ」

「……大佐」

そこで、ラウラの意識は途切れ、それと同時に暴走は止まった。

「ラウラ……」

だが、そこで待つてたのはやはり厳しい現実だった。

「記憶喪失？」

「ええ、遺伝子強化試験……ではなかつた。ラウラ・ボーデヴィッヒは、越界の瞳に対応しきれなくなつて暴走、そしてそのときに脳細胞に異常が起こり、記憶喪失になつたんでしょ」

「それ以外に何か負傷はあつたんですか？」

「奇跡的に他は何もあつません、身体も貴方が頑張つてくれたのでダメージは皆無です」

「そうですか……」

「それよりも、医者としては貴方の身体の方が心配ですよ」

「こなんもん、ラウラが感じた痛みに比べちゃなんてことない……」

「……」

「本当に、申し訳」わざせんでした」

「何を誤る必要がある」

「正直、私はこのドイツ軍のやつ方があまり好きではないのです」

「……」

「HSで、なにもかもが変わってしまった」

「だが、HSで悪くなつた」とばかりじゃない

「やつですけど」

「……だが記憶を塞ぎたい気持ちは分かる、俺だつて辛い」

「は」

「とにかく、これからハリハリなつるんだっ」

「ええと、第一回モンド・グロッソン優勝者である『戦乙女』<sup>ブリュンヒルト</sup>」（日本）

本代表の織村千冬さんが特別コーチをすることになつています」

「やうか……なら、いい

「えつと、ビルハリく？」

「帰るんだ、ロシア」

やう言つて、無線機でロシアから要請を頼む。

……きっと『俺』も辛かつたんだろう、たった一年とは言え初めて好きと言える人が記憶喪失になつたなんてな。そうやって塞ぎこみたい気持ちは分かる、そして塞ぎこんでしまつたのも分かる。

迎えに連れられて帰国した後、五日間『俺』は飲まず食わずに籠つた。ラウラが受けた痛み、それとは程遠いがかなりの痛みを受けただろう。そして六日目、俺は記憶封印能力を使い……イズムルートを手にしてからの記憶を封印した。

それと同時に生まれたのが、俺が今まで本当だと思い込んでいた“偽りの記憶”。真実を知ることで、今までの記憶が幸せだったかのような錯覚を受ける。だが、現実に向き合わないといけない。

どうせつても、輪廻に巻き込まれることは確かなのだから。

俺が運命から逃げるために……いや、立ち向かうことを恐れたからこそ使った能力。今の俺には、十分すぎるほどにその衝撃は大きかった。

「どうかな、お田覚めは」

「樋無さん？」

気がつけば、生徒会室で横になつていた。

「眞実を知つた氣分はいかが?」

「なんとこうか……、その」

「残酷だった」

ズバリと言ひ当てる権無せん。

「そうですね、俺が信じていたものは偽りだったし、なにより俺のせいでラウラを傷つけてしまつていた」

「輪廻を感じたでしょ」

「はい、今までよつ強く……」

「うん、君は合格だね。もう出て行つてこいよ

「用件はそれで終わりですか?」

「ええ。もう既に『診た』から

「そうですか。では、失礼します」

なんだか物凄いさっぱりとした感じで終わつてしまつたが、きっとこれでいいんだろう。俺はちょっと頭の整理がてら眠りたい……夕食食べてないが気にしないことじみや。

もうすぐ、トーナメントも始まる。あの時に書いた言葉は、今まで変わらなく俺の中にある。ラウラが好きだって気持ちは変わらずにそこにある、これが終わつたらラウラにまた伝えよ。

だから今は……、ちょっと一休みしちゃう。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼（後書き）

今回で過去編は終了です。  
いかがだったでしょうか？

書いていて若干涙ぐみながら、ラウラさんを暴走させてしまいました。

まあ、現在のラウラさんは色々と元気なのであしからず。

そして次回からトーナメントが開催されます。

戦闘描写に悩みながら頑張りますので、是非続きを読むよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3537y/>

---

十二のBSIS

2011年11月29日21時45分発行